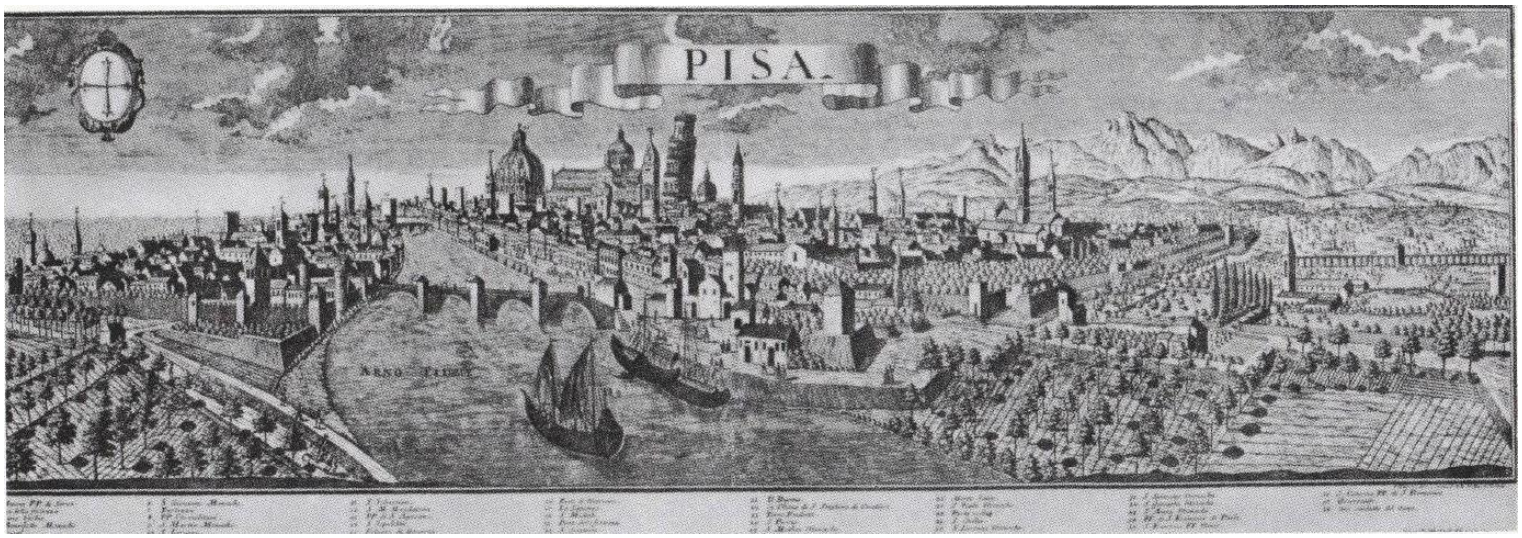


図I-1　ピーサ遠望　G.B. Probst（18世紀前半）

中世ピーサ年代記[1]

（I）

古代ローマからメローリアの海戦（1284）まで

図I-2　ピーサ鳥瞰　Matthaeus Merian, c.1640

0 まえがき

この研究ノートの動機は二つあった。一つは、ﾏﾙｺ･ﾎﾟｰﾛ旅行記の筆記者ﾙｽﾃｨｹｯﾛについて何か手がかりが得られないかと思ったのと、もう一つは、『神曲』での名高いｳｺﾞﾘｰﾉ伯の悲劇やこの隣国の扱いについていま一つよく分からなかったからである[2]。

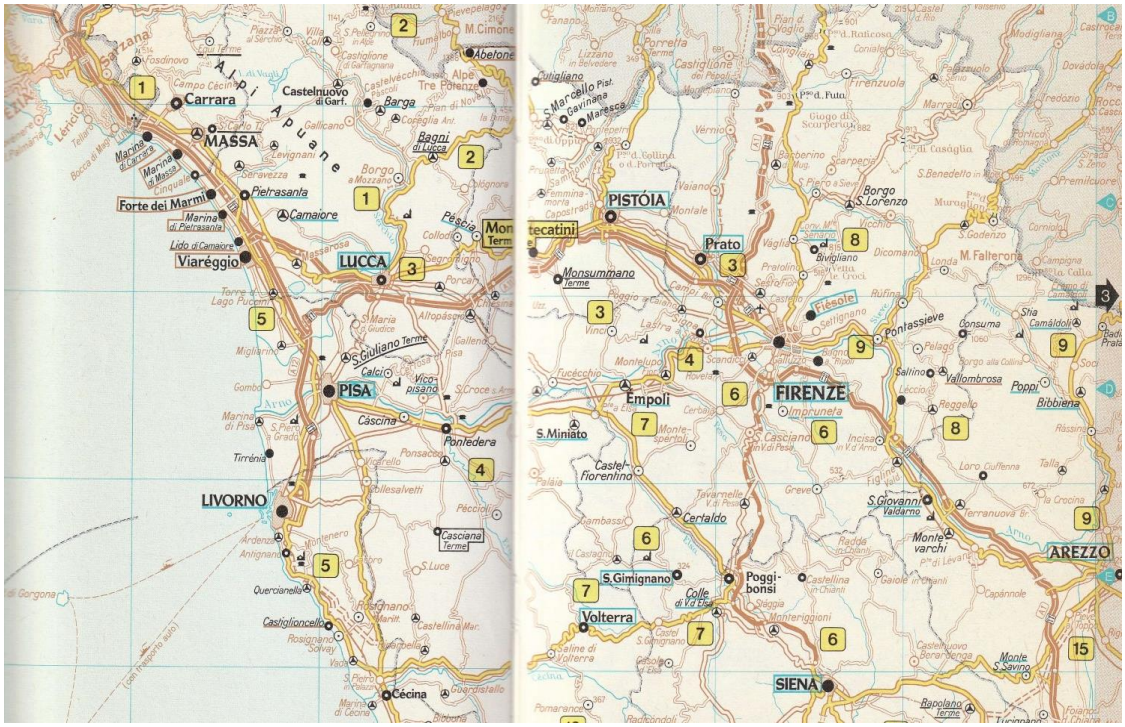
ﾙｽﾃｨｹｯﾛについては、ﾋﾟｰｻの人であること、ｱｰｻｰ王騎士物語の作家であることなど、ごく僅かのしかも漠然としたこと以外ほとんど何も知られていない。とりわけ、おそらくﾏﾙｺらと同じ頃ｼﾞｪﾉｳﾞｧの獄から解放されたとされる以後のことは何も分からない。しかし、かの旅行記におけるこの筆録者の役割は大きく、その成功の一半を彼に負うているにもかかわらず、後世での両者の扱いの差は余りにも大きい。

ｳｺﾞﾘｰﾉ伯については、祖国に対する裏切りの罪で地獄界でも最下層の第九圏に落とされているのだが[3]、この老伯がなぜ裏切り者なのか、何故にそれほど重い罰を受けているのか、判然としかねる。その程度の裏切りや罪なら、昔も当時もいくらでもあったのではないかと思われるし、それに一読するかぎりでは、詩人はこの老伯にむしろ同情しているかの印象を受ける。またﾋﾟｰｻは、それにまつわって「新たなﾃｰﾍﾞ novella Tebe」と呼ばれ、麗しき国ｲﾀﾘｱの恥ゆえこの世から抹殺してしまえとまで罵られているのだが[4]、これまたどうしてであろうか。確かにﾋﾟｰｻはﾌｨﾚﾝﾂｪの敵ではあったが、その行いや野心の点でﾌｨﾚﾝﾂｪや他の都市がﾋﾟｰｻと比べてより清廉であったとはとても思えない。

文中その箇所で多少は触れるが、結果的にはこの二つの問題に対する新たな情報を得ることはほとんど何もできなかったが、その歴史をたどっているうちに新たな興味をそそられたのはむしろ、今は斜めになった塔くらいでしか知られぬ一地方都市、かつても今も輝かしく名高いﾌｨﾚﾝﾂｪやｼﾞｪﾉｳﾞｧ、ｳﾞｪﾈｰﾂｨｱやﾐﾗｰﾉの陰に隠れて目立たないこの小ｺﾑｰﾈ（中世自治都市）が、当時最も早く発展し最先端にあった都市国家の一つであり、中世後期のｲﾀﾘｱのみならずﾖｰﾛｯﾊﾟ史において、国際交易や十字軍運動、とりわけ当時の主たる対立軸であった神聖ﾛｰﾏ帝国とﾛｰﾏ教会との闘いの中で、ｲﾀﾘｱ随一の「帝国都市」として大きな役割を

果たしている事実であった。かの書も、ﾏﾙｺ･ﾎﾟｰﾛのｳﾞｪﾈﾂｨｱ、ﾙｽﾃｨｹｯﾛのﾋﾟｰｻ、そしてｼﾞｪﾉｳﾞｧの牢での二人の出会いと､当時のこれら三つの主役都市を舞台にして初めて生まれえたのだとも言えよう。

このノートはしたがって、前述二つのテーマについて述べるものでも、何らかの史実の真偽あるいはその背景や解釈をめぐって論ずるものでもなく、ﾋﾟｰｻの歴史を、自治都市となった11世紀末頃から、ﾌｨﾚﾝﾂｪに征服されて共和国たることを終える15世紀初め(1406年)までの主な出来事を、他都市国家や諸外国との関係を中心に年代順にたどって記するものにすぎない。そうした意味で、中世ﾋﾟｰｻのほんの年代記風素描である。歴史はえてして勝者の側から書かれるものであるが、今はあまり注目されることのない一自治都市ｺﾑｰﾈが、いかに誕生し、成長・発展し、やがて衰退・没落していったか、その粗筋を紹介するとともに、当時の多くの名高い出来事をまた別の角度、敗者の側から眺めるという点で、いささかの意味はあるのではないかと思う。[5]



図I-3　ピーサ周辺地図、トスカーナ地方（Touring Club Italianoより）

1 前史：ﾛｰﾏ時代から10世紀まで

かの町を訪れて誰しも気づくことの一つが、小じんまりとしたその地方都市に不釣り合いに立派な大聖堂と例の斜塔の存在であろう。それは、同市の急速な発展と永続し得なかった繁栄、それと同じほどに急激な衰退と没落を物語っている。そして少しでもその歴史を紐解けば、その主たる一因が何よりもその位置、地理にあったことを知らされる。後に少し詳しくみるが、ｲﾀﾘｱ地方都市の中でも最も早く発展したのは､ｱﾙﾉ河口近くに位置して海と港を持つと同時に、いくぶん内陸よりにあって豊かな後背地と旧ﾛｰﾏ街道とを持つというふうに、海・陸両用の都市の性格を持っていたからであったとすれば、その急激な没落も、まず最初、より良好な港は持つが後背地を持たずして海に賭けるしかなかった海洋都市ｼﾞｪﾉｳﾞｧによって、次に、はるかに広大な後背地を持つが海への出口を欠いた内陸都市ﾌｨﾚﾝﾂｪによって陵駕されたことにみられるごとく、かつて有利であったその両用の性格が中途半端なものとなり、マイナスに働いたからであった。

その性格は事実、古代ﾛｰﾏの時からすでに後のライヴァル都市たち、一漁村にすぎなかったｼﾞｪﾉｳﾞｧ、ﾌｨｴｰｿﾞﾚの麓の寒村ﾌｨﾚﾝﾂｪ、人棲まぬ潟であったｳﾞｪﾈｰﾂｨｱと比べて、ﾋﾟｰｻをして重要な地方都市の一つたらしめていた。

市の起源についてはつまびらかでないが､ｲﾀﾘｱ建国神話やﾍﾟﾛﾎﾟﾝﾈｿｽ半島にある同名の町ﾋﾟｰｻにちなんでｷﾞﾘｼｬに結び付け、その原住民ﾍﾟﾗｽｺﾞｲあるいはﾋﾟｰｻ人が移り住んだとするのはもちろん伝説である[6]。ｴﾄﾙｽｷ起源説についても、最初敵対していたことや､町の発展が北のﾓﾝﾃ･ﾋﾟｻｰﾉの方から始まっていることからして疑問視され、北西のﾘｸﾞｰﾘｱ人の可能性の方が高いと考えられている。

前6-5世紀にはそのｴﾄﾙｽｷの勢力下に入り、前4-3世紀にはｳﾞｫﾙﾃｯﾗの北の塞となるが、その頃興隆してきたﾛｰﾏにｴﾄﾙｽｷが敗れて解放される。しかし今度は北からのﾘｸﾞｰﾘｱ人の脅威に対抗するためｲﾀﾘｶ同盟に加わり、ﾛｰﾏのｿｷｱ（同盟市）となる。ﾛｰﾏの発展につれてその影響を強く受けるとともに、ﾃｨｯﾚｰﾆｱ海ﾛｰﾏ以西における最大の港としてその戦闘基地､またﾘｳﾞｨｴﾗからﾌﾟﾛｳﾞｧﾝｽ沿岸ならびにｺﾙｼｶやｻﾙﾃﾞｰﾆｱとの交易拠点として重きをなすにいたる。前114-109年には、それ

までﾋﾟｰｻまでで止まっていたｱｳﾚﾘｱ街道が、時のｺﾝｽﾙ､ｴﾐﾘｳｽ･ｽｶｳﾛｽによって北・西へと延ばされ（旧ｴﾐｰﾘｱ街道）、近郊農業は流通ルートを得て市は海のみならず陸の要衝ともなった。前1世紀ｼｯﾗの時にはﾛｰﾏ市民権を得てｿｷｱからｺﾛｰﾆｱ（植民市）となり､ﾙｯｶとともに貨幣鋳造を含む自治権を獲得するまでになっていた。

帝国ﾛｰﾏ時代には、ﾛｰﾏ人の入植も増え、またその港ゆえに変わらぬ地位を保ち続けた。紀元1世紀には今に残るﾌｫｰﾙﾑ(広場)が建設されｼﾞｭﾘｱ家に献じられているし、57年にはﾈﾛ帝がやってきて、ﾋﾟｰｻをﾎﾟﾈﾝﾃ（西方属州）の貢納と税の集積地と定め、そこで計量してﾛｰﾏに送るよう命じたという[7]。

またｷﾘｽﾄ教伝説によると、福音史家ﾏﾙｺらを伴った使徒ﾋﾟｪｰﾄﾛは、ｱﾝﾃｨｵｷｱからﾛｰﾏに向かう途中嵐にあってｱﾙﾉ河口に漂着し、そこに祭壇を築いてミサを行い、住民を改宗させたという(44年)[8]。今もﾊﾞｼﾞﾘｶのあるｻﾝ･ﾋﾟｪｰﾛ･ｱ･ｸﾞﾗｰﾄﾞの名はそれに由来する。ｷﾘｽﾄ教の普及とともに4世紀そこに教会が建てられ、中世をとおして巡礼地の一つとなった。

5世紀ｹﾞﾙﾏﾝ人の侵入後は記録に乏しいが、西海岸に位置し、北ｲﾀﾘｱやﾗｳﾞｪﾝﾅから遠く離れていたこともあって、比較的平穏だったもようである。ﾃｵﾄﾞﾘｯｸの東ｺﾞｰﾄやﾕｽﾃｨﾆｱﾇｽのﾋﾞｻﾞﾝﾁﾝの時ﾋﾟｰｻで何が起こったのか､どのような関係にあったのか明らかでないのに対して、6世紀後半から侵入してきたﾛﾝｺﾞﾊﾞﾙﾄﾞ族には直接占領され、支配されたことが確認されている。法的には、全ﾄｩｽｷｱに及んだﾙｯｶ公領の下に置かれ、ｶﾞｽﾀﾙﾄﾞ（王国役人）によって治められた。移住してきたｹﾞﾙﾏﾝ人との融合も進み、ヨーロッパの南北を結ぶ旧ｱｳﾚﾘｱ街道と港のおかげで8世紀ﾘｭｰﾄﾌﾟﾗﾝﾄ（在位712-44）らのもとで発展、商業も盛んとなった。

次いで同世紀後半ｼｬﾙﾙ･ﾏｰﾆｭが勝利して以後も、支配者がﾛﾝｺﾞﾊﾞﾙﾄﾞからﾌﾗﾝｸに代わっただけでﾋﾟｰｻには大きな変化はなかったもようで、ﾄﾞｭｰｸｽ（公）からｺﾒｽ（伯）に代わったﾙｯｶの下に置かれていたものと見られる[9]。

一方この頃から始まるのが、地中海を舞台とするｲｽﾗﾑ教徒との闘いである。その中でﾋﾟｰｻは、ﾃｨｯﾚｰﾆｱ海随一の海洋都市としてｷﾘｽﾄ教勢の主力を構成し、大きな役割を果たして地歩を固め、その後の発展を準備してゆく。ﾋﾟｰｻが係わった最も早いものとしては､828年北ｱﾌﾘｶ沿岸解放のため､ﾌﾟﾛｳﾞｧﾝｽ､ﾘｸﾞｰﾘｱの町々とともに船団を派遣した記録がある。その前年にはｲｽﾗﾑ教徒によるｼﾁｰﾘｱ征服が始まっていた(827-902年)。彼らはそのうちｲﾀﾘｱ沿岸を略奪するだけでなく内陸

部にまで侵入するようになり、874年にはそうしてﾗﾂｨｵ海岸に上陸したｻﾗｾﾝ人をﾋﾟｰｻ艦隊が駆けつけて追い払った。

その後のｶﾛﾘﾝｸﾞ王朝の終焉に続く混乱と分裂の時代にも、ﾋﾟｰｻは相変わらずﾙｯｶを首都とするﾄｽｶｰﾅ伯領の下にあり、その代官ｳﾞｨｽｺﾝﾃ（副爵）もなお駐在していた。しかし全く従属していたわけではなく、実質的には「ﾄｽｶｰﾅ地方の首都」(ﾘｭｰﾄﾌﾟﾗﾝﾄ)であった。各都市は互いに比較的独立し、自治を保っていたが、一方ではそれ故に、後に深刻なものとなる都市同士の争いが始まることになる。

2 成長期：1000-1171年

1004年、北ｱﾌﾘｶとｽﾍﾟｲﾝから出撃したﾑｽﾘﾑはこの年もﾗﾂｨｵ海岸に押し寄せた。ｲﾀﾘｱ半島の政治は不安定で、中央権力は遠くﾄﾞｲﾂにあり、無いに等しかった。時の教皇ﾖﾊﾝﾈｽ18世はそのためﾋﾟｰｻに救援を要請、その艦隊はﾃｰｳﾞｪﾚ川で彼らを破った。これは、この頃すでにﾋﾟｰｻがﾃｨｯﾚｰﾆｱ海最大の海上勢力として教会側に頼りにされていたことを示す。ところがその留守を狙ってﾙｯｶが、近郊ｳﾞｧﾙ･ﾃﾞｨ･ｾﾙｷｫ（ｾﾙｷｫ川流域）に侵入して荒らすという事件があった[10]。ﾓﾝﾃ･ﾋﾟｻｰﾉを隔てて向かい合う、わずか15ｷﾛほどしか隔たっていぬこの二つの都市は、以前から領土の境界や商売の縄張りをめぐって敵対する間柄となっていた。翌1005年には再び教皇の要請を受けて、ﾚｯｼﾞｵ･ｶﾗｰﾌﾞﾘｱをﾑｽﾘﾑから解放している[11]。

当時地中海を舞台に活動していたﾊﾞﾚｱﾙ諸島のｻﾗｾﾝ君主ﾑｾｯﾄことﾑｶﾞﾋﾄﾞ･ｲﾌﾞﾝ･ｱﾌﾞﾄﾞ･ｱｯﾗｰが1015年ｻﾙﾃﾞｰﾆｱを占拠したので、ﾋﾟｰｻはｼﾞｪﾉｳﾞｧとともに1017年5月ﾄｯﾚｽに遠征して勝利した。が、その後の同島の支配をめぐって両市の対立が顕わとなり、ﾋﾟｰｻがｼﾞｪﾉｳﾞｧを追い出す結果となった。これは、当時急速に力をつけてきた同じ海洋都市ｼﾞｪﾉｳﾞｧとの対立が避け難いものであることを物語り、ﾋﾟｰｻの困難な行く末を予告するものであった。しかしこの頃はまだﾋﾟｰｻの力の方がはるかに上であり、ﾃｨｯﾚｰﾆｱ海から不信の輩を一掃せよとのﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄｩｽ8世の要請に応えて、翌年再びｻﾙﾃﾞｰﾆｱに遠征隊を繰り出したのもﾋﾟｰｻであった。これら一連の遠征はﾃｨｯﾚｰﾆｱ海におけるﾋﾟｰｻの覇権を確立するとともに、その後ﾑｾｯﾄとの間の何度かの攻防を経て1050年頃最終的に征服したｻﾙﾃﾞｰﾆｱは、その豊かな農産物と資源（塩・皮革・鉱物）、それに西地中海における戦略的位置によってそれから3世紀にわたってﾋﾟｰｻの富と力の源泉となる。途中嵐を避けてたまたま立ち寄ったｺﾙｼｶを占領したのもその時のことである[12]。

南部ｲﾀﾘｱと同じように、相次いでﾛｰﾏ帝国、ｳﾞｧﾝﾀﾞﾙ族(455-)、ﾋﾞｻﾞﾝﾁﾝ(534-)の支配下に置かれてきたｻﾙﾃﾞｰﾆｱは、8世紀に入るとやはりｲｽﾗﾑ教徒の侵略を受け、ｱﾗﾌﾞ人に貢納金を払っていた模様である。いくつかの要塞を占領されただけで全域的に支配されていたわけではなかったが、度重なるその襲撃を避けて住民は内陸部に移住し、少なくとも11世紀始めには、ﾄｯﾚｽ（北西）・ｶﾞｯﾙｰﾗ（北東）・ｶﾘｱﾘ（南東）・ｱﾙﾎﾞﾚｰｱ（南西）の四つのｼﾞｭﾃﾞｨｶｰﾄ（自治国）が形成され、それぞれ一人のｼﾞｭﾃﾞｨﾁｪ（司法官・国主）がたてられていた。その国主たちの訴えによりかくてようやくｱﾗﾌﾞ人の危険を取り除いたﾋﾟｰｻは、そこに積極的に商業進出をはかり、各国で免税特権を獲得し、その影響力を強めてゆく。‘ｺﾝｿﾚ’（自治行政官）の語が初めて登場するのもそのｻﾙﾃﾞｰﾆｱ統治に関する1081-85年の「ｶﾙﾀ・ｻﾙﾀﾞ」で、ｲﾀﾘｱでは最も早いものとされるが、実質的には上の諸事にも明らかなごとく、ずっと早くから自治を行っていたものとみられる。とりわけ海洋活動において際立ち、10世紀すでに「ﾋﾟｰｻは陸においては従属していたが、海においては自由である」と評されるほどであった。市政の中心には司教と封建的土地貴族、それに造船・海運業者たちがあり、司教はﾛｰﾏに直属していた。その造船・海運業と陸の流通ルートたる旧ﾛｰﾏ街道、それにﾑｽﾘﾑ海賊による破壊やその危険性のために打ち棄てられらた海岸沿いのｱｳﾚﾘｱ街道に代わって内陸寄りに敷かれたﾌﾗﾝﾁｰｼﾞｪﾅ街道(ﾌﾗﾝｽ街道、現ｶｯｼｱ)のおかげで商業が飛躍的に発展し、交易先は沿岸諸市はもちろんｴﾙﾊﾞ・ｻﾙﾃﾞｰﾆｱ・ｺﾙｼｶからｼﾁｰﾘｱ・北ｱﾌﾘｶ・ｽﾍﾟｲﾝ・ﾚｳﾞｧﾝﾃ諸国へと広がっていった。それにともなって人口も増え、ﾛｰﾏ時代のﾌｫｰﾙﾑのあったところを中心とするｱﾙﾉ北岸の最初の市街区は狭くなり、その周辺や南岸にも住むようになった。こうして新しく商業貴族が形成され始める。

南方にﾉﾙﾏﾝ人が押し寄せてきたのもこの頃のことである。彼らは南ｲﾀﾘｱからﾋﾞｻﾞﾝﾃｨﾝを追い出し(1045-80年)、ｼﾁｰﾘｱ征服に取り掛かっていた(1061-91年)。ｻﾗｾﾝ人からのｷﾘｽﾄ教徒の解放という意味からも、また通商上の利害の一致という点からも、1063年にはﾋﾟｰｻのｶﾞﾚｰ船がﾊﾟﾚﾙﾓ港に突入して、ﾛﾍﾞｰﾙ・ｼﾞｽｶｰﾙを支援した。しかしすぐﾉﾙﾏﾝ人と利害衝突し、彼らの船を襲い、近辺を荒らして引き

揚げるに終わった。この時の戦利品で、翌年ｶﾃﾄﾞﾗﾙ(大聖堂)の建設が始まったという。

ｻﾙﾃﾞｰﾆｬ遠征のおりに占領したｺﾙｼｶにおけるﾋﾟｰｻの政治的･商業的支配を不当とするｼﾞｪﾉｳﾞｧは、1066年ﾋﾟｰｻ海岸に攻撃をかけてきた。かくて両市の表面上の平和は破れて対立は決定的となり、ﾋﾟｰｻもｼﾞｪﾉｳﾞｧ周辺の港に攻撃を加えた。長く続くこの対立がﾑｽﾘﾑを利すのをみて、教皇ｳｨｸﾄﾙ3世は1087年両市のあいだを調停した。

休戦がなるとさっそく対ｲｽﾗﾑ共同遠征が計画され、ﾋﾟｰｻの副爵ｳｺﾞｰﾈ･ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ指揮の下に200隻のｶﾞﾚｰ船がﾏｸﾞﾚﾌﾞのｱﾙ･ﾑﾊｼﾞｬに向かい、そこの君主ﾁﾐｰﾉと戦って大勝利をおさめた。さらにはｽﾍﾟｲﾝのｻﾗｾﾝ人に対しても遠征し、ｱﾙﾒﾘｱの王ｱﾚﾏｲﾓｳﾈと戦い、捕らえられていた多数のｷﾘｽﾄ教徒を開放した。

これら遠征とその成功は聖地征服を考えていた聖庁を満足させ、ﾋﾟｰｻの司教座は大司教座に格上げされ、さらに1091年と1092年のｳﾙﾊﾞﾇｽ2世の教書によって、ｺﾙｼｶは教皇庁の知行地としてﾋﾟｰｻの大聖堂に寄進されることになった。翌1093年同教皇はﾋﾟｰｻの大司教ﾀﾞｲﾍﾞﾙﾄ･ﾗﾝﾌﾗﾝｷにｻﾙﾃﾞｰﾆｬでも諸特権を承認し、かくてﾋﾟｰｻ大司教座はｺﾙｼｶとｻﾙﾃﾞｰﾆｬの首座となり、市は両島の政治的・商業的権益をほぼ独占する形となった。

帝国側でも、当時ﾋﾟｰｻに住んでいたﾄｽｶｰﾅ女伯ﾍﾞｱﾄﾘｰﾁｪが生前多くの寄進を行い、1076年に没してﾄﾞｩｫｰﾓに埋葬された。後継したﾏﾃｨﾙﾃﾞも、母にならうことになる。皇帝ﾊｲﾝﾘﾋ4世もすでに1081年市に司法権を認め、ｻﾝ･ﾛｯｿｰﾚの森(1084年)やｳﾞｧﾙ･ﾃﾞｨ･ｾﾙｷｫの地(1089年)を建設中のｶﾃﾄﾞﾗﾙに寄進していた。

1094年の文書にははっきりとｺﾝｿﾚの語が現れ、初代は副爵ﾋﾟｪﾄﾛ･ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ。かくてｺﾑｰﾈが正式に誕生する。ｺﾝｿﾚは、最初は特定の期間だけで数も一定しなかったのが、後には毎年12人に定着する。古くからの土地貴族や新興商業貴族たちの中から選ばれた彼らは、大司教と協力して市政を担い、支配階級を形成してゆく。

1095年ｸﾚﾙﾓﾝ宗教会議でｳﾙﾊﾞﾇｽ2世は聖地への十字軍を勧説し、同会議にはﾋﾟｰｻ大司教ﾀﾞｲﾍﾞﾙﾄも出席していた。陸路をとった最初の遠征では十字軍士を輸送

することはなかったが、1098年のｱﾝﾃｨｵｷｱ占領には50隻をもって活躍した。翌1099年には大司教の下に120隻の艦隊を派遣し、ｼﾘｱそしてｴﾙｻﾚﾑ攻撃に貢献した[13]。ﾀﾞｲﾍﾞﾙﾄは、ﾉﾙﾏﾝのｱﾙﾉﾙﾄﾞに代わって聖地の総大司教に任命され(1100年)、そのまま同地にとどまった(1107年没)。これらの結果ﾋﾟｰｻは、ｱｰｸﾚやｱﾝﾃｨｵｷｱをはじめとするｼﾘｱ沿岸都市で商業植民地や免税特権を獲得し、それにｺﾝｽﾀﾝﾁﾉｰﾌﾟﾙでも皇帝ｱﾚｸｼｵｽ・ｺﾑﾈﾉｽから同様な権利を承認されて、ｳﾞｪﾈﾂｨｱ・ｼﾞｪﾉｳﾞｧとならんで東方交易でも一大勢力としての地位を築くことになる。一方では、ﾋﾞｻﾞﾝﾁﾝ側やｳﾞｪﾈﾂｨｱ艦隊との衝突や妨害も始まっていた。1098年にはコルフ島を占領したが、翌99年にはヴェネツィア隊によって追放された。

その後叙任権をめぐる聖権と帝権の綱引きの中で、教皇ﾊﾟｽｸｧﾘｽ2世は1112年、多くのｷﾘｽﾄ教徒が奴隷となっているﾊﾞﾚｱﾙ諸島遠征を訴えた。その海軍力からしても地理的・通商的利害からしても、中心となったのは今度もﾋﾟｰｻだった。大司教ﾋﾟｪｰﾄﾛ・ﾓﾘｺｰﾆを総指揮官とし、12人のｺﾝｿﾘともども300隻のｶﾞﾚｰ船を提供した。またこの遠征にはﾙｯｶ・ﾌｨﾚﾝﾂｪ・ｼｪｰﾅ・ﾋﾟｽﾄｨｱ・ｳﾞｫﾙﾃｯﾗのﾄｽｶﾅ諸市のほかﾛｰﾏやﾛﾝﾊﾞﾙﾃﾞｨｰｱからも参加があり、総勢500隻3000人にのぼる大規模なものとなった。1113年春に出発し、翌年から1116年にかけてまずｲｳﾞｨｻﾞついでﾏｼﾞｮﾙｶを攻撃してｷﾘｽﾄ教徒を解放した。しかしこの時も各市の利害が対立し、ｼﾞｪﾉｳﾞｧは初めから参加を拒否したし、ﾙｯｶ兵は途中で去っていった。

この遠征成功の功績により1118年、皇帝と対立してﾋﾟｰｻに逃れ来ていた次の教皇ｹﾞﾗｼｳｽ2世はｶﾃﾄﾞﾗﾙを聖別し、ﾊﾞﾚｱﾙ諸島をそこに寄進した。教皇はﾋﾟｰｻの船でﾏﾙｾｲﾕまで送られ、ﾌﾗﾝｽに渡ったがそこで没する。少し前1115年には女伯ﾏﾃｨﾙﾃﾞが後継者のないまま没し、ﾄｽｶｰﾅはすでに全てｺﾑｰﾈとなっており、伯領はかくて名実共に消滅した。

このようにﾄｽｶｰﾅとﾛﾝﾊﾞﾙﾃﾞｨｰｱ諸都市からなる遠征軍を率いることによって、ﾋﾟｰｻは西地中海における海上勢力の覇者たることを示したが、その成功と教皇からの報償はﾙｯｶとｼﾞｪﾉｳﾞｧの嫉妬を呼び起こさずにはおかなかった。

遠征に参加しなかったｼﾞｪﾉｳﾞｧは、その間にﾘｸﾞｰﾘｱ沿岸を支配下に置き、ﾎﾟﾙﾄｳﾞｪｰﾈﾚを征服していた。両市のちょうど中間にある良港、今のﾗ・ｽﾍﾟｰﾂｨｱにあ

たるこの地はその後絶えざる係争点となってゆく。爾来ｼﾞｪﾉｳﾞｧとは、1133年新教皇ｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ2世の調停によって5年間の休戦が結ばれるまで、ﾃｨｯﾚｰﾆｱ海全域で衝突が繰り返された。その調停とは、ｼﾞｪﾉｳﾞｧ司教を大司教に昇格させ、その上ｺﾙｼｶの六つの司教座を両市で等分し、南半分のｱﾚｰﾘｧ･ｼﾞｱｯﾂｧ･ｻｸﾞﾚﾄの三つをﾋﾟｰｻのものとし、北半分をｼﾞｪﾉｳﾞｧに与えるというものだった。こうして失った三つの司教座の代わりに、ﾋﾟｰｻはｻﾙﾃﾞｰﾆｱでの特権をさらに獲得したが、むしろこれはｼﾞｪﾉｳﾞｧの力がそれほどまでに強大なものとなり、もはやなんらﾋﾟｰｻに劣るものではないことを意味していた。上述の決定は宗教上のものであり、商業的にはｺﾙｼｶにおけるﾋﾟｰｻの優位はまだ揺るがなかったが、それでもこれ以後徐々にｼﾞｪﾉｳﾞｧの進出が強まってゆく。

ﾙｯｶも再びｳﾞｧﾙ･ﾃﾞｨ･ｾﾙｷｮに侵入した。この近すぎる二つのライヴァル都市の間には、北ｲﾀﾘｱやﾌﾗﾝｽとﾛｰﾏを結ぶ内陸街道ﾌﾗﾝﾁｰｼﾞｪﾅの支配、境界にあるｺﾝﾀｰﾄﾞの所有権とその封建領主たちへの権威、さらにはﾏﾃｨﾙﾃﾞの遺産や貨幣鋳造権と、争いの種は尽きなかった。

ちょうどこの頃ｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ2世は、ｼﾁｰﾘｧ王国のﾙｯｼﾞｪｰﾛ2世のたてた対立教皇ｱﾅｸﾚﾄｩｽ3世を避けて海路ﾋﾟｰｻに逃れ来ていた。そして大陸に渡り、ﾌﾗﾝｽのﾙｲ、ｲｷﾞﾘｽのﾍﾝﾘｰ、ﾄﾞｲﾂのﾛﾀｰﾙに支援を要請して再びﾋﾟｰｻに帰ってきた。先の調停はこの時のものであった。そこへﾛﾀｰﾙ率いる帝国軍が合流し、1133年ﾋﾟｰｻ軍の護衛の下にｳﾞｨﾃﾙﾎﾞ、そしてﾛｰﾏに入城して対立教皇を追放した。ﾛﾀｰﾙ3世(在位1133-37)もこの時ﾛｰﾏで戴冠した。南ｲﾀﾘｱのﾉﾙﾏﾝという共通の敵のまえに、教会と帝国が良好な関係にあった時期である。

さらには、ﾙｯｼﾞｪｰﾛ2世に攻撃されたﾅﾎﾟﾘのｶﾌﾟｱ公ﾛﾍﾞﾙﾄ2世がﾋﾟｰｻにやってきて支援を要請したので1135年ﾅﾎﾟﾘに向かったが、ﾙｯｼﾞｪｰﾛ2世の艦隊に阻まれ、この時はｱﾏﾙﾌｨを急襲するだけに終わった[14]。しかし翌年には教皇の要請により再びｲﾀﾘｱにやってきたﾛﾀｰﾙ2世の軍隊と、ﾋﾟｰｻから出発した教皇と共に、ﾋﾟｰｻ艦隊もﾅﾎﾟﾘ救出を海から支援した。さらに翌1137年にかけて南ｲﾀﾘｱ沿岸を攻略し、ｻﾚﾙﾉを略奪した。こうしてﾋﾟｰｻは、先行していた海洋都市国家ｱﾏﾙﾌｨを没落させることとなったが、150年後には自らも同じ運命を忍ばなければならぬこととなる。

1137年ﾛﾀｰﾙを継いだｺﾝﾗｯﾄﾞ3世も、南ｲﾀﾘｱの領土を取り戻すために支援を要請

し、これに応えてﾋﾟｰｻは艦隊を出撃させた。これら一連の皇帝の遠征軍への参加と支援は、その後帝権と教権の確執が激化してゆく中で、前者との結びつきを強め、ﾋﾟｰｻに親帝国寄り政策を取らせるきっかけとなったものとして後の歴史に大きな意味をもつ。

1145年に選出された新教皇ｴｳｹﾞﾆｳｽ3世はﾋﾟｰｻ(ﾓﾝﾃﾏｰﾆｵ)出身の人だったが、その師にあたる聖ﾍﾞﾙﾅﾙﾄﾞの呼びかけによって組織された第2回十字軍(1147-9年)には、ﾋﾟｰｻはﾙｯｶとの争いに手を取られて参加する余裕はなかった。

1149年ｴｳｹﾞﾆｳｽ3世はﾌﾗﾝｽからの帰途ﾋﾟｰｻに立ち寄り、再燃したﾙｯｶとの境界争いを調停し、翌年にはｼﾞｪﾉｳﾞｧとの間で29年間の休戦を結ばせた。両市の力はもはや互角であり、沿岸地帯やｻﾙﾃﾞｰﾆｱ･ｺﾙｼｶだけではなく、ｵﾘｴﾝﾄからｽﾍﾟｲﾝにいたるあらゆる地域で利害の衝突を見るにいたっていた。両市は各地にｺﾝｿﾚを置いてそれぞれの権益保護を図った。

ﾋﾟｰｻが法的にほぼ完全な独立を達成したのもこの頃で、もはや帝国や伯領を代表していないとはいえ、形式的に土地管理人として存在していたｳﾞｨｽｺﾝﾃを1153年に廃し、その手に残っていた財務権限を取り上げた。こうして体制を整えたｺﾑｰﾈ政府は、商業と手工業の発展にともなって流入し増大する都市人口に対処するため、ｺﾝﾀｰﾄﾞ征服に向かった。そのため各地の封建領主や修道院と対立しなければならなかったが、教会側も自らの大司教区の拡大を意味したからこれに協力した。

帝国でも大きな変化が起こっていた。1152年ｺﾝﾗｯﾄﾞ3世(在位1137-52)が死亡し、甥のﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世(在位1152-90)が後を継いだ。彼はｲﾀﾘｱに神聖ﾛｰﾏ帝国の権威を再興する確固たる意志を抱いており、2年後の1154年ｲﾀﾘｱに親征、ﾛﾝｶｰﾘｧで帝国議会を開き、翌年ﾊﾟｳﾞｨｰｱでｲﾀﾘｱ王位、ﾛｰﾏでﾊﾄﾞﾘｱﾇｽ4世から皇帝位に就いた。南のみならずｲﾀﾘｱ全土の統一を押し進めようとするこの強力な皇帝の出現に、教皇庁はﾉﾙﾏﾝ以上に警戒感を強め、両権の対立はさらに激化する。その中で、ﾛﾀｰﾙ2世のときにすでに帝国寄りに傾いていたﾋﾟｰｻは、自らの商業的発展のためにも、はっきりと親帝国政策を取り始める。ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世もこれに応えて、ｺﾑｰﾈの反封建地主闘争を助け、ﾙｯｶ･ｼﾞｪﾉｳﾞｧとの争いでは常にﾋﾟｰｻの肩をもった。

南ｲﾀﾘｱを占領するﾉﾙﾏﾝとの敵対という点でも、皇帝はｲﾀﾘｱ統一という観点から、ﾋﾟｰｻは商業的進出から利害が一致した。が、それは他方では、教皇庁との関係の悪化を引き起こさずには済まなかった。

ﾙｯｶとは、1155年にﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋの仲裁で全ﾄｽｶﾅ都市が加わる形で和平交渉が成立し、30年の休戦が結ばれた。最大の係争点は、ﾋﾟｰｻとﾌｨﾚﾝﾂｪを繋ぐ道の支配にあった。ｱﾙﾉ川沿いのその道は、ﾌｨﾚﾝﾂｪ商品の海への出口に当たるﾋﾟｰｻ港への唯一の輸送路であったが、その一部ｳﾞｧﾙ･ﾃﾞｰﾗの地点にﾙｯｶ領があり、それが争いの種となっていた。この道は後に、ﾌｨﾚﾝﾂｪが力をつけてくるにつけﾌｨﾚﾝﾂｪとの間の最大の問題となり、最後にはﾋﾟｰｻの敗北の原因となるものである。またこの時、それまでﾙｯｶにしか認められていなかった貨幣鋳造権がﾋﾟｰｻにも許され、もう一つの摩擦の種となった。

一千百年代半ば頃ﾋﾟｰｻはその発展の最初の頂点を迎える。1162年に始まったｻﾝﾀ･ﾏﾘｰｱの8月の大市にはﾖｰﾛｯﾊﾟ中から商人が集まり、またｺﾝﾀｰﾄﾞからは職人が大量に流入したため、旧市街では収容しきれなくなり、市街区を広げることとなった。北岸は旧城壁内のﾎﾞﾙｷﾞ（あるいはﾃﾞｨ･ﾒｯﾂｫ）区を中心に、西にﾎﾟﾝﾃ区、東にﾌｫｰﾘﾎﾟﾙﾀ区を増やし、南岸はｷﾝｼｶ区とした[15]。かくて市面積は旧城壁内の30ﾍｸﾀｰﾙから一挙に114ﾍｸﾀｰﾙとなり、人口は1万-1万5千に上ったと見られる。1155年からは9年かけて北岸の新市街にも城壁が巡らされ[16]、当時としてはｲﾀﾘｱ最強のものといわれ、事実これが破られることはついになかった。ｺﾝﾀｰﾄﾞもそれに対応する四つの行政区、ｳﾞｪﾙｼｰﾘｱ（西北）・ﾙｯｹｰｼﾞｱ（北）・ｳﾞｧﾙﾀﾞﾙﾉ（東）・ﾏﾚﾝﾏ（南）に分けられた。洗礼堂の建設も1152年に始まり、1256年頃完成を見ている。橋もﾎﾟﾝﾃ･ｳﾞｪｯｷｫ一つしかなかったため、1182年新橋ﾎﾟﾝﾃ･ﾇｫｰｳﾞｫが架けられた。

ｺﾑｰﾈは、ｺﾝｿﾘとｾﾅｰﾄﾙ、市の各区から6人ずつ選ばれた24人からなる評議会、それに大司教によって動かされていた。大司教はほとんどｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ、ｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶ、ｳﾍﾟｯｽﾞｨﾝｷﾞら大封建領主の旧貴族、あるいはｸﾞｧﾗﾝﾃﾞｨ、ﾗﾝﾌﾗﾝｷ、ｼｽﾞﾓﾝﾃﾞｨら新興貴族らの中から選ばれた。評議員は最初はｺﾝｿﾚの補佐にあたっていたが、後に独自の権限を有するようになった。市民の声を聞く必要のあるときは大聖堂でﾊﾟﾙﾗﾒﾝﾄｩﾑ（市民議会）が開かれた。

この頃のﾋﾟｰｻ人のエネルギーは、文化面でも建築や芸術のみのとどまらなか

った。1110年ﾋﾟｰｻに生まれ、ｺﾝｽﾀﾝﾁﾉｰﾌﾟﾙで勉強し、同地からﾊﾟﾝﾃﾞｯﾀのテキストをもたらし、また膨大なｷﾞﾘｼｬ古典文献を翻訳して、当時最大の法律家とされたﾌﾞﾙｸﾞﾝﾃﾞｨｵ(1110-93)が活躍したのはこの頃で、ﾋﾟｰｻは当時慣習法から実定法へと革新されつつあった新法学の旗手となった。

ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世は2回目のｲﾀﾘｱ遠征を行い、1158年ﾛﾝｶｰﾘｬで帝国議会を開催し、ﾚｶﾞﾘｱ憲章を定めたが、北ｲﾀﾘｱのｺﾑｰﾈは反乱した。ﾋﾟｰｻは、ﾌｨﾚﾝﾂｪ・ﾙｯｶ・ｼｪｰﾅらﾄｽｶｰﾅのｺﾑｰﾈとともに皇帝側に付き、領土と商業上の特権を得ようとしてﾐﾗｰﾉ攻囲には兵を提供した。

1160年、ﾄｽｶｰﾅでのﾏﾃｨﾙﾃﾞの諸権利を継承したﾊﾞｳﾞｨｴﾗ侯ｸﾞｪﾙﾌｫがｻﾝ・ｼﾞｪﾈｰｼｫで会議を開き、各市に忠誠の誓いを求めたがﾋﾟｰｻはこれを拒否し、ﾙｯｶ・ﾌｨﾚﾝﾂｪと対立した。その後彼はﾋﾟｰｻにやってき、大司教ｳﾞｨｯﾗｰﾉに旧諸特権を確認する特許状を与え、またｼﾞｪﾉｳﾞｧとﾙｯｶを親教会勢力に引き込んだ。かくて孤立したﾋﾟｰｻは、もはや皇帝をあてにして親帝国政策を押し進めるほかなかった。

その皇帝ﾊﾞﾙﾊﾞﾛｯｻは、ﾊﾄﾞﾘｱﾇｽ4世の死後(1159･12･1)ｱﾚｸｻﾝﾃﾞﾙ3世にたいしてﾛｰﾏ貴族ｵｯﾀｳﾞｨｱｰﾉを対立教皇ｳｨｸﾄﾙ4世としてたてた。これにより、それまで聖俗の一致協力を誇っていたﾋﾟｰｻでも、ついにｺﾑｰﾈ側と教会側が対立する。ｺﾝｿﾘは聖庁側の教皇を否定し対立教皇を認めることを誓ったため、大司教ｳﾞｨｯﾗｰﾉはｺﾞﾙｺﾞｰﾅ島に亡命を余儀なくされ、ｺﾑｰﾈは代わってﾍﾞﾆﾝｶｰｻをその地位に就けた。かくて市ははっきりとﾛｰﾏ教会に反旗を翻す形となった。

1161-62年のﾐﾗｰﾉ攻略への兵の提供に感謝してﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世は1162年4月6日特許状をﾋﾟｰｻに送り、自領から他都市商人を排除すること、そのｺﾝﾀｰﾄﾞを内陸はｴﾝﾎﾟﾘまで、沿岸ははるか南のｴﾙｺﾚまで拡大することを認めた。これの調印にﾋﾟｰｻは大代表団を派遣し、帝国のｲﾀﾘｱ代表部ﾊﾟｳﾞｨｰｱで署名された。かくてﾋﾟｰｻは広大なｺﾝﾀｰﾄﾞを共和国領土として所有することになり、海上のみならず陸上でも大勢力となった。ｳﾍﾟｯｽﾞｨﾝｷﾞ・ｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶ・ｹﾞﾗﾙﾄﾞ・ｲﾙﾃﾞﾌﾞﾗﾝﾄﾞらの大封建領主たちも抵抗することなくこれを承認した。

一方、かくて親帝国の旗色を鮮明にし、また他のｺﾑｰﾈには認められていない大きな特権を得たﾋﾟｰｻと、他都市との争いは避けられないものとなった。まずﾋﾞ

ｻﾞﾝﾁﾝのﾏﾇｴﾙが、ﾋﾟｰｻが中立を捨てたことを理由に自領内のﾋﾟｰｻ商人千人を追放し、商品は押収、特権を無効にすると脅かした。ｼﾁｰﾘｱのｸﾞﾘｪﾙﾓも、この同盟関係を脅威と感じてﾉﾙﾏﾝ領内のﾋﾟｰｻ商人を投獄、商品を没収した。ｺﾝｽﾀﾝﾁﾉｰﾌﾟﾙでは、ｼﾞｪﾉｳﾞｧ人との間で流血騒ぎとなった。ｼﾞｪﾉｳﾞｧとは、皇帝特使ﾗｲﾅﾙﾄﾞの仲裁で和解したが、1163年ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世が再びﾋﾟｰｻに新たな特許状を与え、「全ﾄｽｶﾅ諸市の上に立つ」としたため再燃、またもやﾃｨｯﾚｰﾆｱ海各域で衝突した。

1164年にはﾊﾞﾙﾊﾞﾛｯｻは、ｼﾁｰﾘｱ遠征のため艦隊の提供を求めてきた。2年前の特許状で、南ｲﾀﾘｱが征服されたあかつきには、ﾅｰﾎﾟﾘ・ｻﾚﾙﾉ・ﾒｯｼｰﾅ・ﾊﾟﾚﾙﾓの半分、ｶﾞｴｰﾀ・ﾏｯﾂｧｰﾗ・ﾄﾗﾊﾟﾆの全部を封土として授かり、帝国領土内での通商の自由を約束されていたﾋﾟｰｻは、これを期待して皇帝に完全な忠誠を誓った。

ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世は、教皇軍を破ってまずｱﾝｺｰﾅに向かい、それからﾛｰﾏに侵攻し、対立教皇ﾊﾟｽｸｧﾘｽのもとでｻﾝ･ﾋﾟｴﾄﾛのﾐｻに臨んだ。ﾋﾟｰｻも8隻の船を派遣してこれを海から支援した。ところが1167年ﾛｰﾏ郊外に駐屯していた皇帝軍がマラリアにやられたため、ﾊﾞﾙﾊﾞﾛｯｻは退却を決定、ｼﾁｰﾘｱ遠征を実行することなく、ﾋﾟｰｻ・ﾙｯｶを経て北に去ってしまった。

ﾊﾞﾚｱﾙ諸島遠征後ﾋﾟｰｻの覇権が確立されていたｻﾙﾃﾞｰﾆｱでも、12世紀に入ってその地位が脅かされ始めていた。四国のうちｱﾙﾎﾞﾚｰｱ国主ｺﾐｰﾀはｼﾞｪﾉｳﾞｧと条約を結び、その支援の下に全島を支配しようとし、ﾋﾟｰｻに支持された他の三国と対立した。この争いはﾋﾟｰｻ大司教ｳﾞｨｯﾗｰﾉの介入で1146年にいったん収まっていたが、ｺﾐｰﾀの子ﾊﾞﾘｿﾞｰﾈは再び全島支配をもくろみ、1163年ﾋﾟｰｻ軍に支援されたﾄｯﾚｽ国と対立した。そこで彼はｼﾞｪﾉｳﾞｧをつうじてﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世に訴え、ｼﾁｰﾘｱ遠征のためｼﾞｪﾉｳﾞｧの協力を必要としていた皇帝は、1164年(8･10)ﾊﾟｳﾞｨｰｱで銀4千ﾏﾙｸの支払いを条件にﾊﾞﾘｿﾞｰﾈをｻﾙﾃﾞｰﾆｱ王に叙任した。しかしこの金をｼﾞｪﾉｳﾞｧから借りていたﾊﾞﾘｿﾞｰﾈは、それを返すことができず、ｼﾞｪﾉｳﾞｧに連れ戻され、それを知った皇帝は彼の叙任を撤回した。これをきっかけにｻﾙﾃﾞｰﾆｱに攻勢を強めるｼﾞｪﾉｳﾞｧと同島を守ろうとするﾋﾟｰｻの攻防は激しさを増し、結局ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世は、ｺﾙｼｶと同じように、ｶﾞｯﾙｰﾗを中心とするﾋﾟｰｻの勢力圏と、ｶﾘｱﾘとﾛｸﾞﾄﾞｰﾛを中心とするｼﾞｪﾉｳﾞｧの勢力圏に分けて調停を計った。

ﾛｰﾏ遠征中はその仲介によって休戦状態となっていたｼﾞｪﾉｳﾞｧと、ﾊﾞﾙﾊﾞﾛｯｻが去るやすぐ衝突が始まり、ﾙｯｶがそれを利用して侵略してきた。両陣営とも周辺のｺﾑｰﾈや領主を味方につけ、総力戦の様相を帯びた。1171年秋、戦線は三方面にわたり、一つはﾃｨｯﾚｰﾆｱ海、もう一つはｾﾙｷｵ川流域、そしてｱﾙﾉとｴｰﾗ川流域だった。最も重要なのは、ｼﾞｪﾉｳﾞｧとﾙｯｶの接点であり、ﾙｯｶにとっては海への出口となるﾓﾄﾛｰﾈだった。11月29日そこで戦闘があり、ﾋﾟｰｻが勝利した。その勝利は、この頃はまだﾋﾟｰｻの軍事力が勝っていたことを意味する。しかしその前の7月4日、背後の憂いを断つべくﾌｨﾚﾝﾂｪとの間で40年の攻守同盟を結んでおり、それはﾋﾟｰｻ港とﾌｨﾚﾝﾂｪの間の商品の輸送権を認める代わりに、ﾌｨﾚﾝﾂｪはﾙｯｶとの同盟を破棄し、戦の時は援助するというものであった。これは後に両市にとって決定的な意味を持つものとなってゆく。この時はﾌｨﾚﾝﾂｪにとって譲歩であったものが、後にﾌｨﾚﾝﾂｪ産業の発展につれて、ﾋﾟｰｻにとって大きく不利なものとなってくる。これはまた、もはやﾋﾟｰｻが独力でライヴァル都市にあたる力のないことを示していた。

3 発展期：1171-1284年

それで決着がついたわけではもちろんなかった。ﾃｨｯﾚｰﾆｱ海でもﾄｽｶｰﾅでもいたるところ、ﾋﾟｰｻ・ﾌｨﾚﾝﾂｪ対ｼﾞｪﾉｳﾞｧ・ﾙｯｶという大枠の中で、大小の戦いは相変わらず絶えることがなかった。と同時にそれぞれ外に向かって同盟関係と商業圏の拡大を求めてゆく。ﾋﾟｰｻはｳﾞｪﾈｰﾂｨｱと5年の友好条約、ｼﾁｰﾘｱのｸﾞﾘｴﾙﾓ2世との無期限平和条約(1169年)、ﾋﾞｻﾞﾝﾁﾝのｴﾏﾇｴﾙ1世ｺﾑﾈﾉｽとの関係修復と同盟を結んだ。一方ｼﾞｪﾉｳﾞｧはﾌﾟﾛｳﾞｧﾝｽやｽﾍﾟｲﾝへと西に積極的に進出した。

この頃1173年鐘楼の建設が開始されている。ﾎﾞﾅﾝﾉ・ﾋﾟｻｰﾉの手になる円形のデザインは斬新なものであったが、知ってのとおり、着工後間もなく傾きはじめて中断され、再開されたのは百年後の1275年のことであった。彼らのもとでこの市に彫刻の工房が栄えていた。

1175年5回目の遠征にやってきたﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世は、特使ｸﾘｽﾃｨｱｰﾉを派遣してｻﾝ・

ｼﾞｪﾈｰｼｮにﾄｽｶｰﾅ諸市の使者を集めてそれぞれの言い分に耳を傾け、両市からの訴えでｻﾙﾃﾞｰﾆｬをもう一度ﾋﾟｰｻとｼﾞｪﾉｳﾞｧの間で分割したほか、捕虜の交換や、ﾙｯｶ貨幣鋳造禁止などを取り決めて一応の和平にこぎつけた。それによってｼﾞｪﾉｳﾞｧとﾙｯｶが離反したのはﾋﾟｰｻにとって有利であったが、一方ﾌｨﾚﾝﾂｪとの関係は冷却化した。とりわけ翌年のﾚﾆｬｰﾉの戦い(1176･5･29)での北ｲﾀﾘｱ･ｺﾑｰﾈ連合の勝利とﾊﾞﾙﾊﾞﾛｯｻの敗北は、ﾄｽｶｰﾅでも帝国の権威に影を落とし、諸ｺﾑｰﾈは反帝国・反封建で同盟し、それに主導的な役割を果たしたのは、急速に力をつけてきたﾌｨﾚﾝﾂｪであった。ﾙｯｶはそれに積極的に加わったが、すでにﾊﾞﾙﾊﾞﾛｯｻから封建領土に対する諸特権を認められていたﾋﾟｰｻは加わらなかった。ﾙｯｶとは1182年に一応の和平を結んだが、これ以後陸上ではﾌｨﾚﾝﾂｪが主たる敵となってくる。

1183年6月25日ｺﾝｽﾀﾝﾂで和を結んで武力による帝国復活の望みを諦めたﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世は、外交によってこれを果たそうとし、1185年最後に南下してきたさいﾉﾙﾏﾝと和解し、息子のﾊｲﾝﾘﾋとｼﾁｰﾘｱとﾌﾟｰﾘｱの王位継承者ｺｽﾀﾝﾂｧとの婚約を整えた。これによってｲｵﾆｱ海やｴｰｹﾞ海にドイツ王家の勢力が及ぶことを見越してﾋﾟｰｻは、商業圏拡大のため親帝国政策を変えなかった。もう一つにはﾌｨﾚﾝﾂｪが反帝国の旗印のもとにﾄｽｶｰﾅの主導権を握りつつあったからであった。

1187年10月にはｻﾗﾃﾞｨﾝによってｴﾙｻﾚﾑが陥落し[17]、新十字軍を呼び掛けたｸﾞﾚｺﾞﾘｳｽ3世は、ﾋﾟｰｻとｼﾞｪﾉｳﾞｧの艦隊を必要としたため、両市を和解さすべくﾋﾟｰｻにやってきたがそのまま死亡し、大聖堂に埋葬された。翌年すぐﾋﾟｰｻで行われたｺﾝｸﾗｰｳﾞｪで選ばれたｸﾚﾒﾝｽ3世はﾊﾟﾚｽﾄﾘｰﾅ大司教で、かつてﾋﾟｰｻのｻﾝﾄ･ﾊﾟｵﾛ･ｱ･ﾘｰﾊﾟ･ﾀﾞﾙﾉのﾍﾞﾈﾃﾞｨｸﾄ派の修道士だった。前任者と同じ意図から新教皇はまずﾋﾟｰｻに旧特権を全て追認し、ｻﾙﾃﾞｰﾆｬのｱﾙﾎﾞﾚｰｱの領地をめぐって争っていた両市を調停して翌年ようやく和平にこぎつけた。その教皇の勧説になる第3回十字軍には、ﾋﾟｰｻは大司教ｳﾊﾞﾙﾄﾞ･ﾗﾝﾌﾗﾝｷ指揮のもと、50隻のｶﾞﾚｰ船をもってｱｰｸﾚ市攻撃等に加わった。ところが1190年、十字軍に遠征していたﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世がｼﾘｱのｻﾚﾌ川で溺死するという思いがけない、ﾋﾟｰｻにとっても手痛い事故が起こった。

その間南ｲﾀﾘｱでは、1189年ｸﾞﾘｪﾙﾓ2世が嫡子のないまま逝き、後継にﾙｯｼﾞｪｰﾛ2世の孫でｸﾞﾘｪﾙﾓの従兄弟ﾚｯﾁｪ伯ﾀﾝｸﾚｰﾃﾞｨが擁立され、南の王国が帝国の手に渡

ることを避けたかったｸﾚﾒﾝｽ3世はそれを承認した。そこへ、父ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ1世の婚姻政策によってﾙｯｼﾞｪｰﾛ2世の長女でｸﾞﾘｪﾙﾓ2世の伯母ｺｽﾀﾝﾂｧと結婚していたﾊｲﾝﾘﾋ6世が王位継承権を主張し、次の新教皇ｹﾚｽﾃｨﾇｽ3世も圧力に屈してこれを認めた。ﾊｲﾝﾘﾋはすぐｼﾁｰﾘｧ遠征を計画し、ﾋﾟｰｻの支援を求めて1191年3月には自らやってき、30年前に父ﾊﾞﾙﾊﾞﾛｯｻがしたと同じような多くの特権を約束した。今や決定的に親帝国政策をとっていたﾋﾟｰｻは、これも帝国寄りだったｼﾞｪﾉｳﾞｧの優位に立とうとしてこれを歓迎した。ﾊｲﾝﾘﾋも4月ｻﾝ・ﾋﾟｪｰﾄﾛで戴冠後3カ月にわたってﾅｰﾎﾟﾘを攻囲したが、またしてもマラリアにやられ、ｼﾁｰﾘｧに向かうことなく退却してしまった。

1194年には残っていたﾀﾝｸﾚｰﾃﾞｨが死亡したため、ﾊｲﾝﾘﾋは再びｲﾀﾘｱにやってきたが、今度はｼﾞｪﾉｳﾞｧに支援を要請し、それまでﾋﾟｰｻにだけ約束していた特権を保証し、両市を競わせようとした。陸路をゆく皇帝の進軍につれてﾋﾟｰｻとｼﾞｪﾉｳﾞｧの艦隊も海路同行した。ｶﾞｴｰﾀ・ﾒｯｼｰﾅと攻撃してﾊﾟﾚﾙﾓに入り、ﾊｲﾝﾘﾋは同年末ようやくｼﾁｰﾘｧ王位につき、ﾉﾙﾏﾝ王朝もついに幕を閉じた。かくて、ﾋﾟｰｻの期待はとりあえず実現された。しかし、道中すでに両市の衝突が始まっており、ﾒｯｼｰﾅでは大規模な争いとなり、ﾊｲﾝﾘﾋはこの市をﾋﾟｰｻに与えた。また征服後は、ｼﾁｰﾘｧにおける諸特権をﾋﾟｰｻにのみ認め、ｼﾞｪﾉｳﾞｧを排斥した。この処遇は当然ながらｼﾞｪﾉｳﾞｧの怒りに火をつけ、和平は破れてﾃｨｯﾚｰﾆｧ海特にｻﾙﾃﾞｰﾆｧとｺﾙｼｶでの海賊行為となって燃え上がった。

この状況を憂えかつまた利用して、ｹﾚｽﾃｨﾇｽ3世が介入に乗り出し、枢機卿ﾊﾟﾝﾄﾞﾙﾌｫ・ﾏｽｶを派遣して1197年春、ｺﾝﾀｰﾄﾞを封建制の絆から解放するとの名目のもとにﾄｽｶﾅ諸市を反帝国でまとめた。秋(11・11)にはﾌｨﾚﾝﾂｪ主導のもとﾙｯｶ・ｼｪｰﾅ・ｻﾝﾐﾆｱｰﾄ・ｳﾞｫﾙﾃｯﾗ・ｱﾚｯﾂｫはｻﾝ・ｼﾞｪﾈｰｼｮ同盟を結んだ。これはﾄｽｶｰﾅ最初のｸﾞｪﾙﾌｨ同盟といわれる。加わらなかったのは、ﾋﾟｰｻ以外ではﾋﾟｽﾄｲｱだけだった。ﾋﾟｰｻはすでにｺﾝﾀｰﾄﾞに対する領土権を皇帝から承認されており、また何よりもﾌｨﾚﾝﾂｪの主導権を嫌った。

そこでﾋﾟｰｻは教会と帝国に対して中立を表明し、二度目にｲﾀﾘｱにやってきたﾊｲﾝﾘﾋのﾒｯｼｰﾅでの死(1197・11・27)に伴う後継問題でも、ﾌﾞﾙﾝｽﾞｳｨﾋのｵｯﾄｰ（ｳｪﾙﾌｪ

ﾝ家）にもｼｭｳﾞｧｰｳﾞｪﾝのﾌｨﾘｯﾌﾟ（ﾎｰｴﾝｼｭﾀｳﾌｪﾝ家）のどちらにも荷担しなかった。教会はﾋﾟｰｻを説得しようとしたが、これを拒否したため市を聖務停止にした。が、新教皇ｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ3世は、ﾄｽｶｰﾅ同盟が強くなりすぎるのを警戒してこれを撤回した。ﾌｨﾚﾝﾂｪはﾌｨﾚﾝﾂｪで教皇の介入を望まず、また本心ではﾋﾟｰｻの加盟を望んでいなかった。かくて両市の対立は決定的に明るみに出、ﾋﾟｰｻは、1171年の条約でﾌｨﾚﾝﾂｪに力をつけさせたことを悔やまねばならなかった。一方ｼﾞｪﾉｳﾞｧも、ｺｽﾀﾝﾂｧの死後子のﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ2世(1194年生れ)の後見役を教皇が引き受けるのを見て、ｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ3世に接近した。両者は1200年ﾊﾟﾚﾙﾓ条約を結び、ｼﾞｪﾉｳﾞｧにｼﾁｰﾘｧにおける特権を認め、ﾋﾟｰｻを排除した。かくてﾋﾟｰｻはほぼ完全に孤立した。

ﾄﾞｲﾂでの後継者争いは、教皇がﾌｨﾘｯﾌﾟを破門しｵｯﾄｰを正式の王として承認したため武力衝突にまで至り、その対立はｲﾀﾘｱでは教皇派ｸﾞｪﾙﾌｨ対皇帝派ｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの争いとして広まった。ﾋﾟｰｻはもはや新皇帝に期待するほかなく、ｷﾞﾍﾞﾘﾆｽﾞﾓを明確にした。

帝位の空白は内政にも対立と混乱をもたらした。市の発展とｺﾝﾀｰﾄﾞからの急速な人口流入にともない、封建土地貴族と商業貴族それに大商人・企業家らﾏﾆｬｰﾃｨと、力をつけてきた中小商人・企業家それに手工業職人らﾎﾟｰﾎﾟﾛの間で利害が対立した。そのため中立的な立場にたてる市外人に市政を委ねる必要が感じられ、かくてﾋﾟｰｻでも1190年頃最初のﾎﾟﾃﾞｽﾀ（市外人行政長官）が誕生している。もっとも最初は名目的で外国人ではなく、ｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶ系のﾃﾃﾞｨｰﾁｫ・ﾃﾞｨ・ｶｽﾀﾆｪｰﾄ伯だった。同時に8人のｺﾝｿﾘの名もみえ、この時期両者が共存していたことになる。またこの頃から目立ってくるのが大貴族間の争いで、とりわけ最も古い家柄を誇る元副爵ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ家と南部ﾏﾚﾝﾏの肥沃な穀倉地ﾄﾞﾉﾗﾃｨｺを拠点とする大豪族ｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶ家の対立である。ﾎﾟﾃﾞｽﾀにも1204年までこれら家系に属する者が交互に就いた。

1202年の第4回十字軍には、ｳﾞｪﾈｰﾂｨｱ主導だったこともあり、またその余裕もなく参加することはなかった。そのため東方ではｳﾞｪﾈﾂｨｱの優位の前に屈してゆくことになる。ﾄｽｶｰﾅでもﾋﾟｰｻの孤立は相変わらず続いており、それを打開するため、1206年ﾎﾟﾃﾞｽﾀに就いたｹﾞﾗﾙﾄﾞ・ｺﾙﾃｳﾞｪｯｷｱ・ﾃﾞｨ・ｸﾞﾗﾝﾃﾞｨは、そのｳﾞｪﾈｰﾂｨ

ｱと結んでｼﾞｪﾉｳﾞｧに当たるという策を取った。共通の敵ｼﾞｪﾉｳﾞｧということで、ｳﾞｪﾈｰﾂｨｱとは比較的良好な関係にあったし、これからも事あるごとに支援を請うことになる。同年ｳﾞｪﾈｰﾂｨｱのﾄﾞｰｼﾞｪ、ﾋﾟｴｰﾄﾛ･ｼﾞｱｰﾆとの間でﾚｳﾞｧﾝﾃでの共同行動とｼﾁｰﾘｱ遠征が約束されたが、ｳﾞｪﾈｰﾂｨｱはｸﾚｰﾀ問題で忙しく、ﾋﾟｰｻは単独でﾊﾟﾚﾙﾓを攻撃したが、教皇の介入もあって失敗した。しかし、1208年初めには何とかｼﾞｪﾉｳﾞｧとの休戦にこぎつけた。

ﾄﾞｲﾂ王位をめぐるｵｯﾄｰ4世とﾌｨﾘｯﾌﾟ4世の争いは、1208年(6･21)ﾌｨﾘｯﾌﾟが暗殺されて終わる。ｵｯﾄｰは早速ｲﾀﾘｱに下って来、ﾐﾗｰﾉ・ﾌｨﾚﾝﾂｪ・ﾛｰﾏと入り、とりあえず南ｲﾀﾘｱの領土権を主張しないとの条件の下に教皇の手で戴冠した(1209･10)が、しかし彼はもとよりそれを守る気はなく、ﾅｰﾎﾟﾘへと侵攻して行った。

久しぶりの皇帝出現に力を得てﾋﾟｰｻは使者を派遣し､ｼﾁｰﾘｱ遠征支援を約束した。そのためｼﾞｪﾉｳﾞｧとの休戦は破れ、教皇からも再び聖務停止令を受けた。それでも1211年艦隊を派遣してﾅｰﾎﾟﾘで皇帝軍と合流したが､ﾄﾞｲﾂ君侯らの反乱により、途中で解散した。一方、約束違反に怒ったｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ3世はｵｯﾄｰを破門して皇帝位を剥奪したため､次のﾄﾞｲﾂ王として1212年ﾊｲﾝﾘﾋ6世の子ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋが選ばれた。

十字軍を計画し､それへの協力を求めてﾋﾟｰｻそしてｼﾞｪﾉｳﾞｧとめぐった教皇は、ﾍﾟﾙｰｼﾞｬで死亡する(1216･7･16)。後任のﾎﾉﾘｳｽ3世はその意志を継ぎ、1217年両市に和平を結ばせて、第5回十字軍が派遣された。ﾋﾟｰｻも40隻のｶﾞﾚｰ船をもって参加し、ﾀﾞﾐｴｯﾀ占領には貢献したが、結果的には惨めな敗北に終わった。

ｵｯﾄｰの死(1218年)によりﾄﾞｲﾂ情勢が安定したため、ﾌｪﾃﾞﾘｰｺ(ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋ)2世は1220年に南下してきた。ｲﾀﾘｱ育ちの彼は帝国再建と半島統一にﾋﾟｰｻの海軍力を必要とすることをよくわきまえており、ﾄｽｶｰﾅに入るとﾋﾟｰｻに直行した[18]。そしてそのｶﾞﾚｰ船でｵｽﾃｨｱに着き、ﾛｰﾏに入城してﾎﾉﾘｳｽ3世から戴冠した。その2日後の11月24日の特許状でﾋﾟｰｻの旧特権をすべて追認し､翌年にはｼﾁｰﾘｱ貿易の特許を与えた。

こうして再びﾋﾟｰｻが優位に立ったため、ﾌｨﾚﾝﾂｪ、ﾙｯｶとの関係が悪化した。政治的にはﾄｽｶｰﾅの主導権をめぐるｸﾞｪﾙﾌｨとｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの対立であるが､その背景には、ﾌｨﾚﾝﾂｪのｺﾝﾀｰﾄﾞが海への出口を求めて南西のﾏﾚﾝﾏへと伸びてきたことと、手工業の発展にともなう商品、羊毛と皮革の争いがあった。皇帝の権威を背景

にﾋﾟｰｻも今度は同盟者を求め、ﾋﾟｽﾄｲｱ・ｳﾞｫﾙﾃｯﾗ・ｻﾝﾐﾆｱｰﾄ・ｼｪｰﾅ・ﾎﾟｯｼﾞﾎﾞﾝｼとｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ都市同盟結び、かくてﾋﾟｰｻはようやく孤立を脱した。しかし1221-22年、1227-33年にわたった戦争では、同盟軍はﾌｨﾚﾝﾂｪ・ﾙｯｶ連合軍に敗れ、ﾌｨﾚﾝﾂｪには金を払って休戦し、ﾙｯｶとはそのまま敵対状態が続いた[19]。

敗戦の原因はむしろ内部にあった。かつて団結を誇り統一が保たれ、とりわけ対外的には社会各層、それにｺﾑｰﾈと教会が一致結束していたのが、ここでもｸﾞｪﾙﾌｨとｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの党派に分裂していったからだった。

ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ家は、婚姻政策を武器にｻﾙﾃﾞｰﾆｱに積極的に進出し、ｼﾞｪﾉｳﾞｧを圧して全島で覇権を確立してゆく。まず、前述ﾊﾞﾘｿﾞｰﾈの死(1184年)による後継問題にﾋﾟｰｻが介入してｶﾘｱﾘを占領し、本土からｵﾍﾞﾙﾄ・ﾃﾞｨ・ﾏｯｻを国主として送り込んで主導権を握った。ｶﾞｯﾙｰﾗでも、国主の死後未亡人ｴﾚﾅとﾗﾝﾍﾞﾙﾄ・ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨが結婚し、その支配を掌中にした。ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ家はさらに、1216年当時ﾎﾟﾃﾞｽﾀの地位にあったｳﾊﾞﾙﾄﾞが、ｶﾘｱﾘ国主ｸﾞﾘｪﾙﾓ・ﾃﾞｨ・ﾏｯｻの死を機会に遠征隊を派遣してこれを占領し、後継者ﾍﾞﾈﾃﾞｯﾀと結婚した。1218年にはその子ｳﾊﾞﾙﾄﾞがﾄｯﾚｽの後継者ｱﾃﾞﾗｰｼｱと結婚してﾛｸﾞﾄﾞｰﾛ国主となった。かくてｻﾙﾃﾞｰﾆｱはほぼ全域がﾋﾟｰｻ、とりわけｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ家の支配下に入った。

一方ｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶ家は、本土市内に勢力を張ってこれに対抗した。それがさらにｸﾞｪﾙﾌｨとｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの対立に結びついてゆく。ｻﾙﾃﾞｰﾆｱに拠点を移したｳﾞｨｽｺﾝﾃｨは、同島の宗主である教皇とも良好な関係を結ぶ必要のあるところからｸﾞｪﾙﾌｨ寄りとなり、一貫してｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆで市政を握っていたｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶに対して、ｻﾙﾃﾞｰﾆｱでの勢力を背景にことごとく対立した。それが対ﾌｨﾚﾝﾂｪの敗戦の責任争いから内乱にまで至り、最初ｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶが優勢だったのが、ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨの勝利に終わり、1226年ﾎﾟﾃﾞｽﾀの仲裁で一応収束した。

皇帝位に就いたﾌｪﾃﾞﾘｰｺ2世が各都市に直属のﾎﾟﾃﾞｽﾀを配置し、直接支配を行おうとした頃、ﾋﾟｰｻでもそれに合わせて新体制が敷かれ、ﾎﾞﾅｯｺﾙｿ・ｶｰﾈがﾎﾟﾃﾞｽﾀの地位にあったとき(1219-21年)以来ｺﾝｿﾚは市政府からすっかり姿を消し、ﾎﾟﾃﾞｽﾀがその全権限を継承した。ﾎﾟﾃﾞｽﾀは選挙で選ばれるようになり、任期は1年だが再選は可能だった。

1226年ｸﾚﾓｰﾅでの帝国議会の後ｻﾝ・ｾﾞﾉｰﾈで第2ﾛﾝﾊﾞﾙﾃﾞｨｰｱ同盟が結ばれ、今度

はいくつかの市がﾌｪﾃﾞﾘｰｺの側に付いた。しかし、聖地遠征に出かけようとしないこの皇帝をﾎﾉﾘｳｽ3世は破門に処した。第6回十字軍(1229年)にはﾌｪﾃﾞﾘｰｺも加わったが、戦うことなくｽﾙﾀﾝと取り引きをして和平を結び、次のｸﾞﾚｺﾞﾘｳｽ9世と聖界側をさらに刺激した。今回はﾋﾟｰｻも52隻をもって参加した。

本土では相変わらずﾙｯｶとの領地争いの一方、ｻﾙﾃﾞｰﾆｬ支配をめぐって有力貴族の争いが果てしなく続いていた。そこに今度は教皇と皇帝とｼﾞｪﾉｳﾞｧが介入する。1238年前述ﾛｸﾞﾄﾞｰﾛ国主ｳﾊﾞﾙﾄﾞ・ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨが死亡したが、生前その夫妻が教会に臣従の誓いをしていたため、教皇ｸﾞﾚｺﾞﾘｵ9世は未亡人ｱﾃﾞﾗｰｼｬを自らの後見下にあるｸﾞｴﾙﾌｫ・ﾎﾟﾙｶﾘと結婚させようとし、破門をもって脅かした。そこへ、ｻﾙﾃﾞｰﾆｬ北部に勢力を有していたｼﾞｪﾉｳﾞｧのﾄﾞｰﾘｱ家が、ﾌｪﾃﾞﾘｰｺ2世にその庶子ｴﾝﾂｫとｱﾃﾞﾗｰｼｬとの結婚を勧めた。介入の機会をうかがっていたﾌｪﾃﾞﾘｰｺ2世はこれにのって二人を結婚させたうえ、ｴﾝﾂｫをｻﾙﾃﾞｰﾆｬ王とした。怒った教皇は彼ら二人を破門し、ﾋﾟｰｻも聖務停止に処した。

1239年12月にはﾌｪﾃﾞﾘｰｺは自らﾋﾟｰｻにやってきたが、その目的は、当時大貴族の下で少しｸﾞｪﾙﾌｨ寄りになっていた政治をｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆに向けることと、庶子ｴﾝﾂｫの王位就任によりこじれたｻﾙﾃﾞｰﾆｬ問題を解決して、同島を帝国の中に組み込むことにあった。彼は、市政に携わるものはｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆに限ることを定め、またｻﾙﾃﾞｰﾆｬ問題では、多くの政略結婚でｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ家を満足させるとともにﾋﾟｰｻの領主権を承認した。

精力的に動くﾌｪﾃﾞﾘｰｺ2世のもとで聖俗両権の確執はさらに激しさを増したが、その対立の中でﾋﾟｰｻは大きな役割を演ずることになる。1240年春ﾋﾟｰｻを発ったﾌｪﾃﾞﾘｰｺが教皇領のﾗｳﾞｪﾝﾅにまで侵攻したため、ｸﾞﾚｺﾞﾘｳｽ9世は彼を廃位させようと公会議を呼び掛けた。これを阻止せんとするﾌｪﾃﾞﾘｰｺの指図で途中のｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ都市が街道を閉ざしたため、教皇はｸﾞｪﾙﾌｨ都市だったｼﾞｪﾉｳﾞｧに公会議への参加者を船でﾛｰﾏに運ぶよう要請した。これに応えてｼﾞｪﾉｳﾞｧは、ﾆｰｽに船を送ってﾌﾗﾝｽ人僧侶を輸送しようとした。そこでﾌｪﾃﾞﾘｰｺはｼﾁｰﾘｱから帝国艦隊を出動させてこれを阻み、一方息子ｴﾝﾂｫをﾋﾟｰｻに派遣して協力を要請した。当時のﾎﾟﾃﾞｽﾀ、ｳｺﾞｰﾈ・ﾛｯｼはｼﾞｪﾉｳﾞｧを説得しようとしたが拒否されたため、1241年ﾋﾟｰｻの4

0隻と帝国軍27隻がﾒﾛｰﾘｱ沖で待ち伏せ、5月13日に衝突し、皇帝側の大勝利に終わった。ｼﾞｪﾉｳﾞｧ船3隻が沈没、22隻が捕捉されて、3人の特使と貴顕高位ほぼ全員が捕らえられ、ﾋﾟｰｻに連行された。ｴﾝﾂｫは彼らをﾒﾙﾌｨのﾌｪﾃﾞﾘｰｺのもとに送った。彼は自分の破門が解かれないかぎり、彼らの開放を拒否した。かくて公会議は流れ、ｸﾞﾚｺﾞﾘｳｽは憤死した(8･22)。教皇はしかし死の前にﾋﾟｰｻとその大司教を破門に付し、特権を全て取り消すことを忘れなかった。これが、ﾋﾟｰｻが国際舞台で活躍した最後となる。大敗北を喫したうえ屈辱的な恥をかかされたｼﾞｪﾉｳﾞｧは、その怨みをはらす機会を狙うところとなり、44年後に同じ舞台ﾒﾛｰﾘｱでそれを果たすことになる。

この情勢を見て1244年ﾘｳﾞｨｴﾗ海岸のｻｳﾞｫｰﾅがｼﾞｪﾉｳﾞｧに反乱し、最初ﾛﾝﾊﾞﾙﾃﾞｨｰｱにいたｴﾝﾂｫに救援を求めたが得られずしてﾋﾟｰｻに求めてきたため、共和国は80隻を派遣し、ﾎﾟﾙﾄｳﾞｪｰﾈﾚの60隻と合流して、このｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ都市に駆けつけ、その解放に成功し、同市での免税特権を獲得した。帰路ﾋﾟｰｻ艦隊はｼﾞｪﾉｳﾞｧ港に近づき、矢を射かけて挑発した。

聖庁側も反撃に移る。間にｹﾚｽﾃｨﾇｽ4世のわずか18日間と、先のﾒﾛｰﾘｱでの高僧の補囚に起因する2年近い空位期間をおいて選ばれた(1243･7･25)ｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ4世は、反皇帝に凝り固まったｼﾞｪﾉｳﾞｧ人ｼﾆﾊﾞﾙﾄﾞ･ﾌｨｪｽｷだった。先例に懲りて新教皇は1244年12月ｲﾀﾘｱ国内ではなくﾘﾖﾝで公会議を開催し[20]、ﾌｪﾃﾞﾘｰｺを廃位して、ﾄﾞｲﾂ王にはﾃｭｰﾘﾝｹﾞﾝ伯ｱﾝﾘﾋを座らせ、ｼﾁｰﾘｱとｴﾙｻﾚﾑは王の空位を宣言した。この強行策はﾌｪﾃﾞﾘｰｺへの不信を生み出し、ｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ勢力に動揺を来たした。1248年ﾊﾟﾙﾏで皇帝軍が大敗したのに続き、翌49年にはﾎﾞﾛｰﾆｱでｴﾝﾂｫ王が市民軍に敗れて捕虜となり、そしてついにﾌｪﾃﾞﾘｰｺがﾌﾟｰﾘｱで突然没した(1250･12･23)。爾来、ｲﾀﾘｱ随一の「帝国都市」ﾋﾟｰｻもまた、帝国と共に衰退の道を歩むことになる。

ﾌｪﾃﾞﾘｰｺ2世の死はﾄｽｶｰﾅの政治体制をすっかり覆した。各市は次々とｸﾞｪﾙﾌｨに転換し、ﾌｨﾚﾝﾂｪではﾌﾟﾘｰﾓ･ﾎﾟｰﾎﾟﾛ政権が誕生、各地でｸﾞｪﾙﾌｨによるｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの迫害・追放が行われた。ﾋﾟｰｻも例外ではなく、貴族体制が崩壊し、1254年にはﾎﾟｰﾎﾟﾛが政権を奪い、ｶﾋﾟﾀｰﾉ･ﾃﾞﾙ･ﾎﾟｰﾎﾟﾛ(ﾎﾟｰﾎﾟﾛの長官)とｺﾝｼｰﾘｫ･ﾃﾞﾘ･ｱﾝﾂｨｱ

ｰﾆ(ﾎﾟｰﾎﾟﾛの評議会)が市政を握った。しかしその政権も、反ﾌｨﾚﾝﾂｪとしてｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの伝統を守り、ｸﾞｪﾙﾌｨには移行しなかった。

ｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの望みは､ﾌｪﾃﾞﾘｰｺとｲｻﾞﾍﾞﾗの子ｺﾝﾗｯﾄﾞが南下して帝国の権利を要求することにあった。その期待に応えてｺﾝﾗｯﾄﾞは1252年遠征を決定、南ｲﾀﾘｱにあった庶子のﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨとﾍﾟｽｶｰﾗで合流し、帝国に反乱してｸﾞｪﾙﾌｨを表明したﾅｰﾎﾟﾘ攻囲から始め、ﾋﾟｰｻも艦隊を送って海から支援した。が、1254年(5･21)ｺﾝﾗｯﾄﾞも26歳の若さで突然の死を遂げた[21]。

ﾌｨﾚﾝﾂｪはﾙｯｶと同盟して、ﾋﾟｰｻの息の根を止めんものと狙い始めた。ﾌｨﾚﾝﾂｪを盟主とするｸﾞｪﾙﾌｨ同盟は1252年ﾓﾝﾀﾙﾁｰﾉの戦いでｼｪｰﾅを破ったのを始めとして[22]、ﾎﾟｯｼﾞﾎﾞﾝｼ、ｳﾞｫﾙﾃｯﾗと屈服させ、全ﾄｽｶﾅを支配、ついにﾋﾟｰｻ領内に侵攻してきた。ﾋﾟｰｻは交渉で危機を回避しようとしたが、ﾌｨﾚﾝﾂｪが、ﾋﾟｰｻの港を自由港とし全ての商品の自由通過を認めよという厳しい条件を出したためこれを拒否、再びﾌｨﾚﾝﾂｪ・ﾙｯｶ・ｼﾞｪﾉｳﾞｧと戦闘を開始したが、結局その軍が市の城壁の下まで迫ってきたため、最初にﾌｨﾚﾝﾂｪが提示した条件で和平を結ばざるをえなかった(1256･9･26)。ﾙｯｶにはいくつかのｺﾝﾀｰﾄﾞを譲渡したが、ｼﾞｪﾉｳﾞｧに対してはｻﾙﾃﾞｰﾆｱの放棄を拒否して戦争を継続した。

ｻﾙﾃﾞｰﾆｱはそれまで、前述のごとき一連の結婚政策によってほぼ全土がﾋﾟｰｻの支配下にあった。ｶﾞｯﾙｰﾗにはｼﾞｮｳﾞｧﾝﾆ･ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ、ｱﾙﾎﾞﾚｰｱはｸﾞﾘｪﾙﾓ･ﾃﾞｨ･ｶﾌﾟﾗｨｱ、ｶﾘｱﾘもﾋﾟｰｻ人入植者の手にあり、ﾛｸﾞﾄﾞｰﾛにだけﾄﾞｰﾘｱ・ｽﾋﾟｰﾉﾗ・ﾏﾗｽﾋﾟｰﾅらｼﾞｪﾉｳﾞｧ人の勢力が残っていた。ところがｶﾘｱﾘのｷｱｰﾉ･ﾃﾞｨ･ﾏｯｻは1256年国主に選ばれるやすぐﾋﾟｰｻに反旗を翻し、ｼﾞｪﾉｳﾞｧと同盟した。ﾋﾟｰｻは、直ちに長老ｹﾞﾗﾙﾄﾞ･ｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶの指揮のもとに軍を派遣して翌年これを征伐した。そしてｶﾘｱﾘ国を三つに分割し、東を前述のｼﾞｮｳﾞｧﾝﾆ･ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ、中央を同ｸﾞﾘｪﾙﾓ･ｶﾌﾟﾗｨｱ、西を二人のｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶ、すなわちそのｹﾞﾗﾙﾄﾞと後に頭角を現してくるｳｺﾞﾘｰﾉに与えた。ｻﾙﾃﾞｰﾆｱはﾋﾟｰｻにとってそれほど重要であり、全貿易量の3分の2を占め、これを失うことは何としても避けなければならなかった。

ｼﾞｪﾉｳﾞｧとの間にはｱﾚｸｻﾝﾃﾞﾙ4世が介入した。この新教皇は前任のｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ4世と違ってﾋﾟｰｻに敵意をもっていず､ﾋﾟｰｻと和解しようとし、金貨3千ﾌﾛﾘﾝの支払とｻﾝ･ﾋﾟｪｰﾛ･ｱ･ｸﾞﾗｰﾄﾞに巡礼のための教会を建てることを条件に、ｸﾞﾚｺﾞﾘｳｽ9世によって出されていた聖務停止令を解き､新大司教ﾌｪﾃﾞﾘｰｺﾞ･ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨを就任

させた[23]。ﾋﾟｰｻもいくぶん教会に接近し、かくて市民は束の間の平和と統一を得た。

長引く帝位空白を心配して、ﾋﾟｰｻ人はｲﾀﾘｱの特権としてそれを自ら選ぶこととし、選挙してｶｽﾃｨﾘｬ王ｱﾙﾌｫﾝｿ・ｲﾙ・ｻｯｼﾞｮを選んだ。彼はそれを受け(1256･3･18)、諸国も認めたが、ﾚｰﾉ伯ﾙﾄﾞｳﾞｨｰｺらはｲｷﾞﾘｽ王ﾍﾝﾘｰ3世の弟ﾘﾁｬｰﾄﾞを推し、教皇も態度を明確にしなかった。

ｳﾞｪﾈｰﾂｨｱはｼﾞｪﾉｳﾞｧとﾚｳﾞｧﾝﾃで争っており、ﾄﾞｰｼﾞｪ、ﾗﾆｪｰﾘ・ｾﾞｰﾉは1257年ﾋﾟｰｻを説得して密かにﾓｰﾃﾞﾅで10年間の攻守同盟を結んだ。この同盟はｼﾘｱですぐ効果をもった。ｼﾞｪﾉｳﾞｧが支配していたｱｰｸﾚを両市が攻撃し(1258･6･24)、大勝利を上げ、再びﾋﾟｰｻの海軍力を証明した。ｼﾞｪﾉｳﾞｧとは教皇が介入して仲裁した。

この間ﾀｰﾗﾝﾄ君主となったﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨは、ｺﾝﾗｯﾄﾞ4世の子ｺﾝﾗｯﾄﾞ5世(ｺｯﾗﾃﾞｨﾝ)の名代として教皇軍と戦い、南ｲﾀﾘｱを回復していた。彼は教皇と和解して、1258年(8･10)にはｼﾁｰﾘｬ王となり、ﾊﾟﾚﾙﾓで戴冠した。これはｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆを勇気づけた。

ﾄｽｶｰﾅではﾌｨﾚﾝﾂｪが、多数のｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ亡命者が逃れきていたｼｪｰﾅを攻撃したため、ｼｪｰﾅはｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ都市に救援を求め、ﾋﾟｰｻは3千の歩兵を送り、ﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨの1千人のﾄﾞｲﾂ騎士と合わせて総計1万5千のｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ軍は、ﾙｯｶ・ﾋﾟｽﾄｲｱ・ｱﾚｯﾂｫ・ｻﾝﾐﾆｱｰﾄなどからなる4万のﾌｨﾚﾝﾂｪ軍をﾓﾝﾀﾍﾟﾙﾃｨで破った(1260･9･4)。これでﾌｨﾚﾝﾂｪのﾌﾟﾘｰﾓ・ﾎﾟｰﾎﾟﾛ政権は倒れる。

ｸﾞｪﾙﾌｨの敗北でﾀﾘｱ・ﾃﾞｨ・ﾄｩｽｶ(ｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ同盟)が誕生し、各地でｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆが政府に戻った。ﾌｨﾚﾝﾂｪでも、ｸﾞｨｰﾄﾞ・ﾉｳﾞｪｯﾛ伯がﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨの代官として、ﾌｧﾘﾅｰﾀ・ﾃﾞｯﾘ・ｳﾍﾞﾙﾃｨら亡命者とｼﾞｮﾙﾀﾞｰﾉ伯下のﾄﾞｲﾂ騎士団を率いて帰還し、そのﾎﾟﾃﾞｽﾀ体制がﾌﾟﾘｰﾓ・ﾎﾟｰﾎﾟﾛに取って代わった。ﾋﾟｰｻでもﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨの支援の下に再び貴族が政権に復帰した。ﾄｽｶｰﾅでは変わらなかったのはﾙｯｶだけだった。ｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆはﾀﾘｱ(同盟軍)を構成してｸﾞｪﾙﾌｨ亡命者を追跡した。ﾋﾟｰｻは、最も多くの亡命者の逃げ込んだﾙｯｶを攻め、ｳﾞｧﾙ・ﾃﾞｨ・ｾﾙｷｵをめぐって戦い勝利した。

ところが、これに危機感を抱いた教皇庁では、1261年に代わった次のﾌﾗﾝｽ人教皇ｳﾙﾊﾞﾇｽ4世が、その手から南ｲﾀﾘｱの領土を取り上げるためﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨを王権の簒奪者と決めつけ、彼に対する十字軍を宣告した。そしてﾌﾗﾝｽ王ﾙｲ9世の下に特使を派遣し、ﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨの手から教会を開放するため、弟のｱﾝｼﾞｭｰ伯ｼｬﾙﾙをｲﾀﾘｱ

に派遣するよう請うた。ｼｬﾙﾙにはｼﾁｰﾘｱとﾅｰﾎﾟﾘの王にすること、貢納の支払いを条件に征服した土地を全て教会からの封土として与えることを約束した。ｱﾝｼﾞｭｰ伯はもちろん承諾した。かくてこれ以後近代に至るまで、ｲﾀﾘｱの運命はﾌﾗﾝｽというもう一方の勢力の手に握られることになる。

ｼｬﾙﾙは1265年5月やはりﾌﾗﾝｽ人の次の教皇ｸﾚﾒﾝｽ4世からの催促でﾏﾙｾｲﾕから20隻で出発、これを知ったﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨは艦隊を派遣してこれを阻止しようとし、ﾋﾟｰｻもｼｪｰﾅ・ｳﾞｫﾙﾃｯﾗ・ﾌﾟﾗｰﾄらのｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ都市と軍を組織して船団を送ったが、嵐に合い、その間にｼｬﾙﾙはﾛｰﾏに入った。

教皇ｸﾚﾒﾝｽ4世は翌年すぐｼｬﾙﾙをｻﾝ・ﾋﾟｪｰﾄﾛでｼﾁｰﾘｱとﾌﾟｰﾘｬの王に任じたが、ｲﾀﾘｱとﾄﾞｲﾂの王と皇帝には戴冠させなかった。それでもｼｬﾙﾙはﾅﾎﾟﾘに進軍してゆき、ﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨはｶｰﾌﾟｱで軍を集めようとしたが、彼に対する十字軍を宣言した教会側を恐れて従うもの少なく、ﾍﾞﾈｳﾞｪﾝﾄの戦いでﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨが敗北し、殺された(1266･2･26)[24]。

ｱﾝｼﾞｭｰの勝利はｸﾞｪﾙﾌｨの勝利とみなされ、ｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ政権は弱体化し、ﾄｽｶｰﾅ各地で再び政府が転換した。が、ﾋﾟｰｻではｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆのリーダーｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶ家のｹﾞﾗﾙﾄﾞがその地位と権威をすっかり固めており、ｷﾞﾍﾞﾘﾆｽﾞﾓは揺るがなかった。

ｼｬﾙﾙは教皇からﾄｽｶｰﾅの皇帝代理に任命され、そこに手を伸ばし始める。翌年春さっそくﾌｨﾚﾝﾂｪに来、ﾎﾟｯｼﾞﾎﾞﾝｼを平定、ﾋﾟｰｻに向かったが、防備の固いのを見て手を付けず、近郊のﾘｳﾞｫﾙﾉとﾋﾟｰｻ港を荒らして去った。ﾙｯｶは当然ｼｬﾙﾙの支配下に入った。

ｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの唯一の希望はｺﾝﾗｯﾄﾞ4世のｺｯﾗﾃﾞｨﾝで、南下するようﾋﾟｰｻから使者が発った。当時まだ16才だったが彼はそれを受け、1267年ｳﾞｪﾛｰﾅ・ﾊﾟｳﾞｨｰｱ・ｻｳﾞｫｰﾅと下り、そこにはｹﾞﾗﾙﾄﾞの送った10隻のｶﾞﾚｰ船が待ち受け、1268年4月7日ﾋﾟｰｻに着いて本陣を設け、市にｼﾁｰﾘｱにおける特権を認めた。ｵｰｽﾄﾘｱの皇子ﾌﾘｰﾄﾞﾘﾋに率いられたﾄﾞｲﾂ軍もﾋﾟｰｻに到着した。6月半ば頃準備が整い、ｺｯﾗﾃﾞｨﾝにはｹﾞﾗﾙﾄﾞが同行して陸路ﾎﾟｯｼﾞﾎﾞﾝｼ・ｼｪｰﾅ・ｱﾚｯﾂｫを征圧し、ﾛｰﾏに入って歓迎を受けた。ﾋﾟｰｻのを含めて40隻の艦隊も南ｲﾀﾘｱ諸港を荒らし、ｲｽｷｱ・ｿﾚﾝﾄ・ﾊﾟｴｽﾄｩﾑなどを征し、ｼﾁｰﾘｱに向かった。ところが皇帝軍は、ﾅｰﾎﾟﾘに軍を集結させたｼｬﾙﾙによってﾀﾘｱｺｯﾂｫで敗北した(1268･8･23)。初戦では皇帝軍が勝利したが、兵士たちがｼｬﾙﾙの陣営を略奪している間の混乱で襲われたという。ｺｯﾗﾃﾞｨﾝは小数の従者とﾛｰﾏに逃げたが救助を拒否され、ｱｽﾄｩｰﾗの港で船を借りてﾋﾟｰｻかｼﾞｪﾉｳﾞ

ｧに渡ろうとしたところをそこの領主に捕らえられ、ｼｬﾙﾙの下に送られた[25]。そして10月24日ﾅｰﾎﾟﾘの広場でｵｰｽﾄﾘｱの皇子とともに処刑され、かくてﾎｰｴﾝｼｭﾀｳﾍﾝ家は終焉した。ﾋﾟｰｻの老伯ｹﾞﾗﾙﾄﾞもその時処刑され、ﾋﾟｰｻ艦隊はﾒｯｼｰﾅから逃げ帰るしかなかった。

ｸﾞｪﾙﾌｨ政府となったﾌｨﾚﾝﾂｪはｼｪｰﾅを破り(1269･6･17)、ｼｬﾙﾙはﾄｽｶｰﾅ代理にﾋﾟｰｻ攻撃を命じた。ﾌｨﾚﾝﾂｪ軍は城壁の下まで攻め寄せたがこれを破ることはできず、その下で貨幣を鋳造し、ﾊﾟﾘｵ(騎馬競走)を催して侮辱するに終わった。この敗戦により、ﾋﾟｰｻでも再びﾎﾟｰﾎﾟﾛが政権を握ることになる。

ﾄｽｶｰﾅではｸﾞｪﾙﾌｨとｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの戦いの行われない所とてなかった。しかしﾙｲ9世とｼｬﾙﾙは、ｴｼﾞﾌﾟﾄのﾏﾑﾙｰｸを直接たたくためｱﾌﾘｶ遠征十字軍を考えており、それにはﾋﾟｰｻの船団が必要だった。そこで彼らは1270年末市に使者を派遣し、南ｲﾀﾘｱでの自由通行権を認めることと引換に、ﾋﾟｰｻ領土にｱﾝｼﾞｭｰの覇権を承認し、金1万2千ｵﾝｽの賠償金を3年間支払うことで、翌年5月12日和平を結んだ。ところが、ｱﾌﾘｶに渡った聖王ﾙｲはﾄｩﾆｼﾞｱで病没し、先ほどの条約により同行していたﾋﾟｰｻ艦隊も引き揚げた。

市では先の敗戦の責任とｹﾞﾗﾙﾄﾞの後継をめぐって、市民の争いが内乱にまで進みつつあった。しかしそれは、ｸﾞｪﾙﾌｨ対ｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆの争いというよりも、貴族対ﾎﾟｰﾎﾟﾛ、および貴族有力門閥間の争いという形を取る。

まず、1271年一人のｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆ貴族が暗殺され、それがｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ家の教会の前で起こったことから、当時のｸﾞｪﾙﾌｨの首領でありｶﾞｯﾙｰﾗ国主の地位にあったｼﾞｮｳﾞｧﾝﾆ･ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨの指令であることが疑われた。その下手人の逮捕をめぐってｺﾑｰﾈと貴族たちが対立し、ﾎﾟﾃﾞｽﾀはｼﾞｮｳﾞｧﾝﾆを追放に処した。ｻﾙﾃﾞｰﾆｬに逃げたｼﾞｮｳﾞｧﾝﾆはそこからﾅｰﾎﾟﾘのｼｬﾙﾙの下に向かい、迎え入れられて、1275年ｼｬﾙﾙの軍とﾄｽｶｰﾅのｸﾞｪﾙﾌｨ軍を率いてﾋﾟｰｻ領のﾓﾝﾄｰﾎﾟﾘに攻めきたり、そこを征圧した。

もう一つの対立はさらに深刻で、ﾋﾟｰｻの貴族ほぼ全てを巻き込むことになる。ｹﾞﾗﾙﾄﾞ亡き後ｹﾞﾗﾙﾃﾞｽｶ家のリーダーとなったﾄﾞﾉﾗﾃｨｺ伯ｳｺﾞﾘｰﾉは穏健なｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾉではあったが、教会側とも良好な関係にあり、新教皇ｸﾞﾚｺﾞﾘｳｽ10世との和解を推進した。教皇はかつて長くｴﾙｻﾚﾑに住んでおり[26]、党派争いとは余り関係がなく、ﾌｨﾚﾝﾂｪ滞在中も両派を和解させようと努力した。ｳｺﾞﾘｰﾉは一方では、前

述の三分割して分与されたｶﾘｱﾘの領地の税金を市に対して支払うことを無視していた。そこでｺﾑｰﾈは彼を逮捕投獄し、税の支払いを約束さすことでいったんは出獄を許したが、結局やはり税金を納めていなかったｱﾙﾎﾞﾚｰｱ国主ｱﾝｾﾙﾓ･ｶﾌﾟﾗｨｱ伯に対してとともに、その領地を没収し、共和国の敵であることを宣言して追放した。ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨ・ﾗﾝﾌﾗﾝｷ・ｳﾍﾟｯｽﾞｨﾝｷﾞ・ｸﾞｧﾗﾝﾃﾞｨ・ｼﾞｽﾞﾓﾝﾃﾞｨ・ｵﾙﾗﾝﾃﾞｨら主たる貴族も同時に亡命を余儀なくされ、ｸﾞｪﾙﾌｨ都市ﾙｯｶに移住した。

ﾄｽｶｰﾅはもはやほぼ全てｸﾞｪﾙﾌｨであり、ｱﾝｼﾞｭｰの支援を後ろだてに、大貴族の復帰とｸﾞｪﾙﾌｨへの転換を画策する。この事態をみてﾌｨﾚﾝﾂｪは彼ら亡命者を招き入れ、ﾙｯｶ･ﾋﾟｽﾄｲｱ･ｼｪｰﾅらのｸﾞｪﾙﾌｨ軍をまとめ、それを先頭にﾋﾟｰｻ領内に侵入してきた。貴族勢を失って数と力で圧倒的に劣るﾋﾟｰｻ軍は、1276年6月9日ﾘﾉﾘｺで敗退した。前述ｳｺﾞﾘｰﾉとｱﾝｾﾙﾓはｻﾝ･ｻｳﾞｨｰﾉに陣を敷いてｺﾑｰﾈと交渉し、新教皇ｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ5世の調停もあって1276年、本土とｻﾙﾃﾞｰﾆｱでの領地の納税を条件として帰国を許された。かくしてﾋﾟｰｻでは再び貴族が復帰し、とりあえず決定的内乱は避けられた。1277年には長く大司教の座にあったﾌｪﾃﾞﾘｰｺﾞ･ｳﾞｨｽｺﾝﾃｨが没し、後にｳｺﾞﾘｰﾉと対立することになる武人肌のﾙｯｼﾞｪｰﾛ･ﾙｯｼﾞｪｰﾘ･ﾃﾞﾘ･ｳﾊﾞﾙﾃﾞｨｰﾆが就位した。

こうした混乱の中でも、1277年ｶﾝﾎﾟ･ｻﾝﾄ(墓園)の建設が再開されている。その頃のﾋﾟｰｻは、ﾆｺｰﾗ･ﾋﾟｻｰﾉ(1248-50)とその子ｼﾞｮｳﾞｧﾝﾆ(1248頃ﾋﾟｰｻ生まれ)を擁し、ｲﾀﾘｱにおける彫刻の中心をなし、ルネサンスの先駆けとなっていた。

13世紀後半ﾋﾟｰｻはもはやﾃｨｯﾚｰﾆｱ海随一の海上勢力ではなく、ｼﾞｪﾉｳﾞｧに遅れを取るようになっていたが、それでも沿岸はﾚﾘﾁからﾁｳﾞｨﾀｳﾞｪｯｷｱ、ｻﾙﾃﾞｰﾆｱ、ｺﾙｼｶの一部、それにｴﾙﾊﾞ島を含むﾄｽｶｰﾅ諸島を領有し、その商業圏はｽﾍﾟｲﾝ・ﾌﾟﾛｳﾞｧﾝｽからｼﾁｰﾘｱ・ｼﾘｱさらには黒海にまで及んでいた。ﾋﾟｰｻ港の通関税とｻﾙﾃﾞｰﾆｱとｴﾙﾊﾞの鉱山からの収入が大きく、ｺﾝﾀｰﾄﾞには農業と牧畜業、市内には昔からの造船業と羊毛工業が発展し、その繁栄はまだまだｼﾞｪﾉｳﾞｧにもﾌｨﾚﾝﾂｪにもさほど大きく劣るものではなかった。

そのｼﾞｪﾉｳﾞｧとの関係も、海賊行為や大小の衝突は頻繁だったが戦争状態には至っていなかった。しかしｲﾀﾘｱ半島への外国勢力の進出は、両市をも巻き込ま

ずにはおかなかった。まず1280年にはｱﾗｺﾞﾝのﾍﾟﾄﾞﾛ3世が、ﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨの娘ｺｽﾀﾝﾂｧを妻とするところから南ｲﾀﾘｱの領土権を主張して新たに登場してくる。そして1282年ｼﾁｰﾘｧの晩鐘の乱をきっかけとするそのｱﾗｺﾞﾝとｱﾝｼﾞｭｰの戦いでは、ﾋﾟｰｻは先に結んだ和平条約に縛られてｼｬﾙﾙに援軍を送らざるをえず、ﾒｯｼｰﾅを攻めたが敗れて5隻を失った。かくてｼﾁｰﾘｧはｱﾗｺﾞﾝのものとなり、ｲﾀﾘｱの運命は以後近代に至るまで、さらにもう一つの勢力ｽﾍﾟｲﾝの手にも握られることとなった。

ｺﾙｼｶでは1282年ｼﾞﾈﾙｶ国で反乱者がｼﾞｪﾉｳﾞｧの支援を求めたため、ﾋﾟｰｻも4隻のｶﾞﾚｰ船を派遣して国主ｼﾉｺｯﾛを支援した。ｺﾙｼｶは両市にとって常に係争の地であったが、今度は全面対決にまで至った。両海軍は同年から翌1283年にかけてｺﾙｼｶ・ｻﾙﾃﾞｰﾆｱの各地、ﾋﾟｫﾝﾋﾞｰﾉ・ﾚﾘﾁ・ﾎﾟﾙﾄｳﾞｪｰﾈﾚで衝突し、一進一退を繰り返した。しかし海軍力はすでにｼﾞｪﾉｳﾞｧの方が勝っていた。ｻﾙﾃﾞｰﾆｱでもあくる1284年反乱が起き、ｼﾞｪﾉｳﾞｧに救援を求めた領主を罰するためﾋﾟｰｻが派遣した35隻がｼﾞｪﾉｳﾞｧ軍に捕まり、その救援に向かった船隊もｼﾞｪﾉｳﾞｧに敗れた。

そこでﾋﾟｰｻは決戦を決意した。まず、ｳﾞｪﾈﾂｨｱの支援を期待してﾎﾟﾃﾞｽﾀにその貴族ｱﾙﾍﾞﾙﾄ･ﾓﾛｼｰﾆを招き、本来ｶﾋﾟﾀｰﾉ･ﾃﾞﾙ･ﾎﾟｰﾎﾟﾛに属する軍事権も与えた。彼は非常事態を宣言し、ｸﾞｪﾙﾌｨとｷﾞﾍﾞｯﾘｰﾆを和解させ、貴族たちも協力を誓い、ｳｺﾞﾘｰﾉ伯がもう一人の貴族ｻﾗﾁｰﾉ･ｶﾞﾙﾃﾞｰﾗとともにｶﾋﾟﾀｰﾉ･ｼﾞｪﾈﾗｰﾚとなって指揮を取ることとなった。1284年始めの数カ月を戦争準備に費やし、計80隻のｶﾞﾚｵﾝ船・ｶﾞﾚｰ船その他を準備した。しかしｼﾞｪﾉｳﾞｧは100隻以上を擁していた。

7月にはいると、ﾓﾛｼｰﾆの提案で力の誇示のためﾌﾟﾛｳﾞｧﾝｽ遠征に繰り出すこととなり、一部がﾋﾟｵﾝﾋﾞｰﾉ港に残った。指揮は前述二人のｶﾋﾟﾀｰﾉ。ｼﾞｪﾉｳﾞｧ軍はｻﾙﾃﾞｰﾆｱにあり、ｶﾋﾟﾀｰﾉ･ﾃﾞﾙ･ﾎﾟｰﾎﾟﾛ、ｵﾍﾞﾙﾄ･ﾄﾞｰﾘｧと提督ﾍﾞﾈﾃﾞｯﾄ･ｻﾞｯｶｰﾘｧが指揮を取っていた[27]。ﾋﾟｰｻ軍はｼﾞｪﾉｳﾞｧ港に姿を現してこれを挑発した。これを侮辱ととったｼﾞｪﾉｳﾞｧは、ｻﾙﾃﾞｰﾆｱにあった艦隊をﾋﾟｰｻに向かわせ、ﾋﾟｰｻの二隊を分断する作戦を取った。8月始めﾄﾞｰﾘｧの艦隊がﾋﾟｰｻ沖に姿を現したが、ｻﾞｯｶｰﾘｧの隊はﾒﾛｰﾘｧ岩礁(ﾘｳﾞｫﾙﾉ沖7ｷﾛ、ﾋﾟｰｻ港から24ｷﾛ)の影に隠れていた。5日夕方、ﾓﾛｼｰﾆの指揮下に攻撃をかけることが決定され、翌6日ｻﾝ･ｼｽﾄの日、出発に際しては大司教ﾙｯｼﾞｪｰﾘが祝福した。午前ﾓﾛｼｰﾆの40隻がまずﾄﾞｰﾘｧ隊に向かった。ｼﾞｪﾉｳﾞｧ軍はﾋﾟｰｻを陸から遠ざけるため退却し、発煙筒でそれを隠した。そこへ岩礁に隠れていたｻﾞｯｶｰﾘｧ隊が背後から襲った。敵が退却したと思って河口を離れ

て戦場に向かったｻﾗﾁｰﾆ隊も戦況が飲み込めぬまま巻き込まれて混乱し、港の守備に残っていたｳｺﾞﾘｰﾉ伯隊も、いったんは出撃したが港を空にすることを恐れて引き返した[28]。

夕方戦いが終わったときには、4分の3が失われ、ﾋﾟｰｻに帰り着いたのは20隻、17隻が沈没し、33隻が拿捕されていた。ﾓﾛｼｰﾆは頭に重傷を負ったが、二人のｶﾋﾟﾀｰﾉは無事だった。多数の死者のうえに捕虜は9千人に上ったという[29]。ｼﾞｪﾉｳﾞｧ軍も損害が大きく、市内にまで攻め上る余力はなかった。

ﾋﾟｰｻの敗戦は、作戦の誤りや船隻数以上にその性能の差にあったといわれる。ｼﾞｪﾉｳﾞｧの船が軽快速の最新型であったのに対してﾋﾟｰｻのそれは、ﾄﾞﾛﾓｰﾆと呼ばれる重装甲板を備えた旧式の大型帆船で操船の自由度において大きく劣っていた。両市の富と力、商業力と軍事力はそれほどまでに差がついてしまっていたのである。かくてその海軍力はまさに壊滅的打撃を受け、海洋勢力としてのﾋﾟｰｻは姿を消す。また陸上でも、この人的損害の大きさからして、ﾌｨﾚﾝﾂｪに対抗することの困難が予想された[30]。

【註】

1. 初出：「大阪国際女子大学紀要23号‐2」1997, pp. 97-120。

下記の諸書を参照した（末尾［　］内略称）：

(1) Ranieri Sardo, *Cronaca di Pisa*, a cura di Ottavio Banti, Roma, Istituto Storico Italiano per il Medio Evo, 1963 [Sardo]. 二つの部分からなり、前半(pp.1-98)は無名氏の手になる世界の創造とﾋﾟｰｻの神話的起源から1354年までの歴史で、単に出来事の構概を年代順にならべたもの。18世紀の編者によって誤って R. Sardo に帰された。後半(pp.99-299)が、1354年から1399年までのｻﾙﾄﾞの詳細な手記。R. Sardo(1399年没)は、1320/24年頃ｷﾝｼｶ区の裕福な商人の家に生まれ、成人して財務官・使節・評議員・ﾌﾟﾘｵｰﾚ等多くの公職に就いた。かく市政内部にあってその情報を伝えていることから、14世紀後半のﾋﾟｰｻの貴重な史料となっている。

(2) Raffaello Roncioni, *Istorie Pisane*, per cura di Francesco Bonaini, Firenze G.P.Vieusseux 1844-45 [Roncioni]. ﾙｯｶとの境界にある Ripafratta の由緒ある貴族の家に生まれ(1557年以降、没は1618年頃)、司教座聖堂参事会員を務めた、ﾋﾟｰｻ史に関する膨大な蔵書の所有者としても知られるRoncioniの年代記。起源から1406年ﾌｨﾚﾝﾂｪに征服されるまでの都市国家ﾋﾟｰｻの歴史。執筆は1592-1606年、ﾄｽｶｰﾅ大公 Ferdinando I de' Medici (1587-1609) に献じ

られている。4巻からなり、前2巻 Tomo I が当年代記、後2巻 Tomo II は Cronache Varie Pisane として、ﾋﾟｰｻの最も古い年代記 Bernardi Marangonis, *Vetus Cronicon Pisanum*, 前述 Sardo のもの(ただし962年以降)、*Chronica Antiqua Conventus Sanctae Catharinae*, その他の古史料が収められている。

(3) Paolo Tronci, *Annali Pisani*, Bologna Arnaldo Forni 1975 [Tronci]. 初版本には、*Annali Pisani di Paolo Tronci*, rifusi, arricchiti di molti fatti e seguitati fino all'anno 1839 da E. Valtancoli Montazio ed altri. Seconda edizione accresciuta delle *Memorie storiche di Pisa dal 1839 al 1862*, scritte da Giovanni Sforza, Pisa presso Angelo Valenti 1868, とあるごとく、15世紀のﾋﾟｰｻ大司教 Paolo Tronci の1441年までの年代記を、Enrico Valtancoli da Montazio, Giuseppe Tabani, Ferdinando Tortoli らによって追加・訂正・校訂したものに、ﾙｯｶの G.Sforza の *Memorie storiche di Pisa* を付け加えて1868-71に出版されたもの。

(4) Giovanni Villani, *Cronica*, Roma Multigrafica 1980 (Firenze 1823) [Villani]. ﾌｨﾚﾝﾂｪの著名な年代記。著者がペストで死亡した1348年以降は、弟 Matteo(1346-60)と息子 Filippo(1360-64)の手になる。

(5) David Herlihy, *Pisa nel Duecento*, Pisa Nistri-Lischi 1990 (*Pisa in the Early Renaissance, a Study of Urban Growth*, Yale Univ. Press 1958) [Herlihy].

(6) Gino Benvenuti, *Storia della Repubblica di Pisa*, Pisa Giardini 1982 [Benvenuti].

(7) Emilio Cristiani, *Nobiltà e Popolo nel Comune di Pisa*, Napoli Istituto Italiano per gli Studi Storici 1962 [Cristiani].

(8) Yves Renouard, *Le città italiane dal X al XIV secolo*, Milano Rizzoli 1975 [Renouard].

(9) Emilio Tolaini, *Forma Pisarum*, Pisa Nistri-Lischi 1992 [Tolaini].

(10) *La Sardegna*, a cura di Manlio Brigaglia, Della Torre [Brigaglia].

(11) D. ｳｪｰﾘｰ(森田鉄郎訳)『ｲﾀﾘｱの都市国家』平凡社 1971 [ｳｪｰﾘｰ]。

(12) N. ｵｯﾄｶｰﾙ(清水・佐藤訳)『中世の都市ｺﾑｰﾈ』創文社 1971 [ｵｯﾄｶｰﾙ]。

(13) ﾎﾞﾙﾋｬﾙﾄ(小竹澄栄訳)『ﾋﾟｻ - ある帝国都市の孤独』みすず書房 1992 [ﾎﾞﾙﾋｬﾙﾄ]。

(14) 清水廣一郎『ｲﾀﾘｱ都市国家研究』岩波書店 1987 (1975) [ｼﾐｽﾞ]。

(15) 米山喜晟『ﾓﾝﾀﾍﾟﾙﾃｨ・ﾍﾞﾈｳﾞｪﾝﾄ仮説』大阪外国語大学 1993 [ﾖﾈﾔﾏ]。

2. もう一つ個人的には、かつて同地のｽｸｫｰﾗ･ﾉﾙﾏｰﾚ･ｽ-ﾍﾟﾘｫｰﾚに2年間学んだという親しみがあった。

3. Inf.XXXIII.1-90.

4. Inf.XXXIII.79-84,89.

5. ﾎﾞﾙﾋｬﾙﾄはその独特の史観に基づいて、「ﾌｨﾚﾝﾂｪ中心の史実の歪曲に心酔し、逸脱している研究の観点」から脱すべきことを説いている(p.47)。

6. 最も流布したのは、ｷﾞﾘｼｬの町ﾋﾟｰｻの君主ﾍﾟﾛﾌﾟｽに結び付けるもので、小ｱｼﾞｱのﾌﾟﾘｭｷﾞｱ王ﾀﾝﾀﾛｽの息子ﾍﾟﾛﾌﾟｽはﾍﾟﾛﾎﾟﾝﾈｿｽ半島のﾋﾟｰｻの王ｵｲﾉﾏｰｵｽの娘ﾋｯﾎﾟﾀﾞﾒｲｱに恋をし、王との戦車競走に勝って娘を手に入れ、その王国も征服した（ﾍﾟﾛﾎﾟﾝﾈｿｽとはﾍﾟﾛﾌﾟｽの島の意）。その後故地ﾄﾛｲｱの王ﾀﾞﾙﾀﾞﾉｽに戦いを挑むが敗れ、ﾋﾟｰｻに戻って領土を息子たちに譲り、あるいは追放されて（ここから、Pisa の語源を 'pinto di casa sua' に求める説もある）、ｲﾀﾘｱはﾄｽｶｰﾅにやってきて町を建設し、ﾋﾟｰｻと名付けたというもの。ｷﾞﾘｼｬ語 pisos は「湿地」という意味で、ｷﾞﾘｼｬのﾋﾟｰｻ（ｱﾙﾍﾟｲｵｽ川とｸﾗｰﾃﾞｵｽ川）と同じように、ﾄｽｶｰﾅのﾋﾟｰｻもｱﾙﾉ川とｾﾙｷｵ川の間に建設された。伝説では前1600年頃のこととされる。

ｳｪﾙｷﾞﾘｳｽも同じ説で、「この勇士ら［ｱｴﾈｰｱｽに付き従うｴﾄﾙﾘｱ出身の兵士］は、ｴｰﾘｽ［ｷﾞﾘｼｬのﾋﾟｰｻがある地方］の、ｱﾙﾍﾟｰｳｽ［同地を流れる川］に起源もち、移ってその後ｲﾀﾘｱの、ｴﾄﾙｽｷｰの国にある、都市ﾋﾟｰｻｴがこの人に、送って服従させたもの」（泉井久之助訳『ｱｴﾈｰｲｽ』岩波文庫（下）pp.166-7）。

別の説では、ﾍﾟﾛﾎﾟﾝﾈｿｽ半島からﾈｽﾄｰﾙとともにﾄﾛｲｱ戦争に行ったﾋﾟｰｻ人が、帰路嵐に遭ってﾄｽｶｰﾅ沿岸に漂着し、ﾋﾟｰｻの町を建設したという(ｽﾄﾗﾎﾞﾝ)。

7. ｳﾞｨｯﾗｰﾆは、ﾋﾟｰｻは最初ｷﾞﾘｼｬの故地の川にちなんで Alfea と呼ばれていたのが、ﾛｰﾏ帝国の港となり、そこで貢納と税を「計る pesare」ことになったため Pisa と呼ばれるようになったと言う(Villani I.48.p.69)。

8. この時そのままﾋﾟｰｻに残ったｷﾘｽﾄ教徒 Torpete は、その後間もなく始まったﾈﾛのｷﾘｽﾄ教徒迫害に抵抗して殉死し、その遺体は船に乗せて流されてﾌﾟﾛｳﾞｧﾝｽ海岸に漂着し、今のフランスの町 San Torpe の名の由来となった、という。

9. この頃(770年代)ｼｬﾙﾙ･ﾏｰﾆｭの宮廷に招かれた人に、ﾋﾟｰｻの文法教師ﾍﾟﾄﾙｽがいる。

10. ﾑﾗﾄｰﾘによれば、これはｲﾀﾘｱ自治都市同士の最初の武力衝突とのこと。

11. 伝説によると、この間のある日の深夜ﾑｾｯﾄがﾋﾟｰｻの町を襲って南岸の地区を荒らし、ｱﾗﾋﾞｱ語で 'kinsica, kinsica!'（燃やせ、燃やせ）と叫びながら放火し始めた。それを耳にした一人の娘が夜着のまま対岸に急を告げ、彼らは撃退された。この言葉から、あるいはその娘 Kinsica dei Sismondi の名から同地区は Kinsica (または Chinzica)と呼ばれるようになり、その女性を讃えて大理石像が建てられたという(Roncioni pp.61-3)。ﾊｰﾘｰによると、Kinsica はｱﾗﾋﾞｱ語だが、'cinta murata'(壁囲い)の意とのこと(Herlihy p.63)。また事実ﾑｽﾘﾑは、夜陰に乗じて上陸し、町に忍び寄って夜明け前の2､3時間に略奪して去るのを常としたという。

12. 古い時代のｺﾙｼｶの歴史は詳らかでないが、ﾛｰﾏ帝国後やはり5世紀にｳﾞｧﾝﾀﾞﾙに、543年ﾋﾞｻﾞﾝﾁﾝに、725年にはﾛﾝｺﾞﾊﾞﾙﾃﾞｨに征服された。9世紀頃からｻﾗｾﾝ人の侵略を受け、829年頃には島の家族4千がﾛｰﾏに避難するほどだったという。そして1015年から1050年頃にかけてのこのﾋﾟｰｻの遠征によってようやく解放された。1077年には教皇ｸﾞﾚｺﾞﾘｳｽ7世の宗主権下に入り、1092年にはﾋﾟｰｻ大司教に属した。かくて宗教・文化・商業・産業・言語と、あらゆる点でﾋﾟｰｻの影響下に置かれた。

13. ｺﾞｯﾌﾚｰﾄﾞ・ﾄﾞ・ﾌﾞｨﾖﾝらに対してｴﾙｻﾚﾑ城壁一番乗りを争ったというﾋﾟｰｻの旗手ｸｯｺ・ﾘｸｯｷとｺｼｪｯﾄ・ﾀﾞﾙ・ｺｯﾚのエピソードが伝えられている(Roncioni p.142)。

14. この時の戦利品に、現在ﾌｨﾚﾝﾂｪのﾗｳﾚﾝﾂｨｱｰﾅ図書館に蔵されているﾕｽﾃｨﾆｱﾇｽ法典ﾊﾟﾝﾃﾞｯﾀがある。

15. ﾎﾞｯｶｯﾁｫも『ﾃﾞｶﾒﾛﾝ』の中でﾋﾟｰｻの裁判官に Riccardo Chinzica なる名を付けている(第2日第10話)。またその中でﾋﾟｰｻの女性のことを、「ウジ虫のようなトカゲに似ぬ女は少ない」とけなしている(II.10.6)。ﾌｨﾚﾝﾂｪではﾋﾟｰｻの女性は醜いという悪口が定着していたとのこと(Giovanni Boccaccio, *Decameron*, a cura di Vittore Branca, Torino Einaudi 1987, p. 304 n.6).

16. 1172年時ﾌｨﾚﾝﾂｪは80ﾍｸﾀｰﾙで、ﾋﾟｰｻはﾄｽｶｰﾅ最大の都市だった。南岸ｷﾝｼｶ区の市壁が完成したのはずっと後1300年頃のことで、それを含めるて185ﾍｸﾀｰﾙとなった。その頃ﾌｨﾚﾝﾂｪはすでに630ﾍｸﾀｰﾙ人口9万人で、同市の発展がいかに急激だったかが分かる。その後ﾋﾟｰｻの市街領域は、19世紀末鉄道開通にともない駅舎の部分が拡張された以外、今に至るまで変わっていない。

17. この時ﾃｨﾙ防衛に活躍したｳﾞｪﾙﾐｰﾘとかｳｰﾐﾘと呼ばれるのはﾋﾟｰｻの商人兼軍人のこと。

18. ﾌｪﾃﾞﾘｰｺ2世がｻﾝ･ﾐﾆｱｰﾄ滞在中、西欧中世最大の数学者といわれるﾋﾟｰｻの人ﾚｵﾅﾙﾄﾞ･ﾌｨﾎﾞﾅｯﾁ(ca.1165-ca.1240)が『算盤の書』を献呈している。彼は、実業家で税関吏だった父のもとで北ｱﾌﾘｶのBugiaに育ち、ｲﾝﾄﾞから伝わりｱﾗﾌﾞ人によって用いられていたアバコ（算盤）の計算法を学ぶ。父の商売についてｴｼﾞﾌﾟﾄ･ｼﾘｱ･ｼﾁｰﾘｱ･ﾌﾟﾛｳﾞｧﾝｽを回り、数学の研究を深める。ﾖｰﾛｯﾊﾟに初めてｱﾗﾋﾞｱ数字をもたらし、二次・三次方程式の解法を伝えた。ﾙｽﾃｨｹｯﾛもこうした流れを汲む階層の一人であろう。

19. ｳﾞｨｯﾗｰﾆによれば、ﾌｪﾃﾞﾘｰｺ2世戴冠式の折、ﾛｰﾏの枢機卿の子犬をめぐってﾋﾟｰｻとﾌｨﾚﾝﾂｪの使節の間で争いがあり、それが戦争にまで発展したという(Villani, VI.2, pp.7-9)。

20. ｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ4世が、自分の聴罪司祭であったｶﾙﾋﾟﾆの東方派遣を決定したのはこの時のこと。

21. ﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨによる暗殺説(Roncioni, Tronci, Villani)は、今では否定されている。

22. ｳﾞｨｯﾗｰﾆは、この勝利を記念してﾌｨｵﾘｰﾉ金貨が鋳造され始めたという。それにまつわって次のようなエピソードを紹介している。その金貨を手にしたﾁｭﾆｼﾞｱ王がｲﾀﾘｱ商人たちに、ﾌｨﾚﾝﾂｪとはどんな町かと聞いたところ、ﾋﾟｰｻ人は「我々の陸のｱﾗﾌﾞ、つまり山人」と答えた。不審に思った王がﾌｨﾚﾝﾂｪ人に尋ねると、彼は「ﾋﾟｰｻは力でも人口でもﾌｨﾚﾝﾂｪの半分にも及ばないし、金貨も持っていない」と答えたので、ﾋﾟｰｻ人は恥入り、それ以来王はﾌｨﾚﾝﾂｪ人にもﾋﾟｰｻ人と同じ待遇を与えた(Villani, VI.53, pp.77-8)。西地中海沿岸ではﾄｽｶｰﾅ商人は一般にﾋﾟｰｻ人と呼ばれたことも関係していようが、国際性という点では、その地の利からして当時はﾋﾟｰｻの方がずっと先端を行っていたであろうことがここからも窺える。

23. ﾊｰﾘｰによれば、この大司教 Federigo Visconti(在位1257-77)の説教の一つは「ﾋﾟｰｻの教会へのﾀﾙﾀﾙ人使節に答えて」と題されており、その中で「聖地がﾀﾙﾀﾙ人の手から解放されるよう」求めている（ただしこのタルタル人とは、当時聖地を占領していたトルコ系イスラム教徒のこと)。また別のところで、ｲﾝﾉｹﾝﾃｨｳｽ4世によってﾀﾙﾀﾙ人のもとに派遣された使節すなわちｶﾙﾋﾟﾆの報告書に言及している(Herlihy, pp.59-60)。当時のﾋﾟｰｻ人、また後のﾙｽﾃｨｹｯﾛにとっても、東方やﾀﾙﾀﾙ人は決して全く無縁な存在ではなかったことであろう。

24. ﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨ(ca.1232-1266)に対しては、ﾀﾞﾝﾃは煉獄編第3歌に登場させて同情を寄せていることが知られる。またその中でﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨはもっぱら、ｱﾗｺﾞﾝ王ﾍﾟﾄﾞﾛ3世の妃となった(126

2年)娘ｺｽﾀﾝﾂｧ(1302没)に訴えかけており、実際1282年ｱﾝｼﾞｭｰのｼｬﾙﾙにﾍﾟﾄﾞﾛが勝利することによって、ｼﾁｰﾘｧはｺｽﾀﾝﾂｧのものとなり、ﾏﾝﾌﾚｰﾃﾞｨの雪辱は遂げられることになる(Purg.III. 112-45)。

25. 別の説では、ｺｯﾗﾃﾞｨﾝらは農夫の姿に変装してｱｽﾄｩｰﾗに着いたともｼｬﾙﾙの追手が探し出したともいう(Roncioni p.565)。『神曲』では、ﾀﾘｧｺｯﾂｫの戦いについては Inf.XXVIII.17 で、ｺｯﾗﾃﾞｨﾝについては Purg.XX.68 でわずかにその名が挙げられるのみ。

26. 1271年ｱｰｸﾚでﾏﾙｺ･ﾎﾟｰﾛ一行が世話になったのはその時のこと。

27. このﾍﾞﾈﾃﾞｯﾄ･ｻﾞｯｶｰﾘｧ(1248-1308)は、当時活躍したｼﾞｪﾉｳﾞｧの個人主義を代表する人物としてﾙﾇｧｰﾙに紹介されている(Renouard, pp.298-9)。

28. ﾋﾟｰｻの年代記では、ｳｺﾞﾘｰﾉ伯の裏切りが強調される。伯は主戦論で、海戦当日も自ら出撃命令を下したにもかかわらず、ﾓﾛｼｰﾆの艦が拿捕されると救助もせずに市に逃げ帰った(Roncioni pp.607-15)。それは、祖国を弱体化させ、独裁者となって自らの権力下に置くためだった(Tronci p.518)。一方、ｳﾞｨｯﾗｰﾆはこうした説を採っていず、ﾋﾟｰｻの敗因には特に触れずに神の摂理に帰している(Villani, VII.XCII, pp.283-85)。

29. この中におそらく、後のﾏﾙｺの筆録者ﾙｽﾃｨｹｯﾛもいたであろうと一般には考えられている。もちろん、それ以前あるいは以後にも数多くあった衝突で捕虜となった可能性は否定できない。ﾏﾙｺとの出会いや筆記の自由が認められたこと、またそれからﾏﾙｺが捕虜となった海戦まで12-14年もの間があることからして、悲惨な境遇に置かれたﾒﾛｰﾘｧの捕虜よりも、その後の海戦の蓋然性の方が高いとする説もある：Cfr. A.A. Michieli, ‘Chi fu e che cosa fece Rusticiano da Pisa’, 《*Atti del Reale Istituto Veneto di Scienze, Lettere ed Arti*》 Tomo LXXXIV 1924-25, pp.325-6. またその獄にしても、少なくともﾏﾙｺの方は、いわゆる牢獄ではなく身代金や捕虜交換目当てにどこかの館に軟禁されていた可能性が高い。

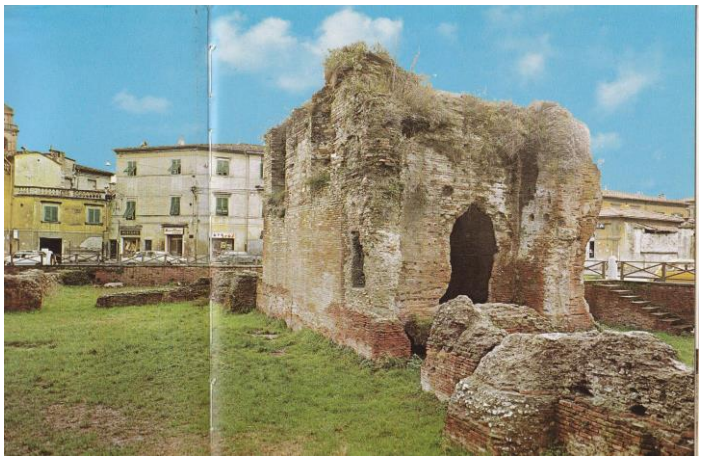
30. ﾊｰﾘｰの計算によれば、1293年時ﾋﾟｰｻの全人口38,000、成人男性12,500 (Herlihy, p.68)。これからして9千余という捕虜の数が、ｺﾝﾀｰﾄﾞからの者を含むにしても、いかに大きいものだったかが分かろう。ここから、「ﾋﾟｰｻを見たければｼﾞｪﾉｳﾞｧに行け」の句が生まれた。

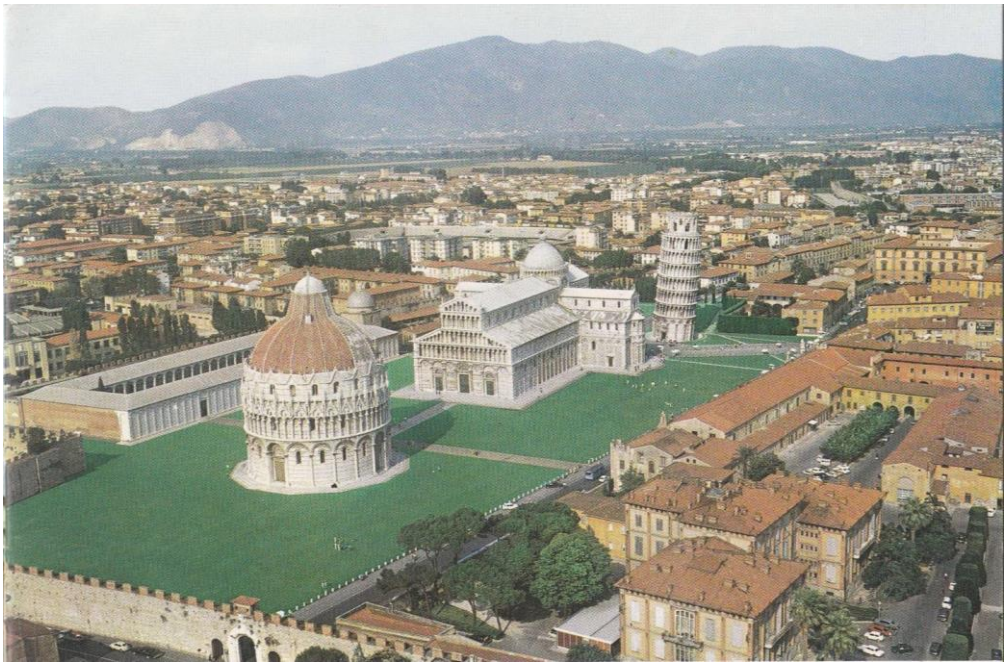
図I-6　トスカナ諸島

（①メローリァ岩礁）

図I-5　Terme di Traiano

（古代ローマ遺跡）





図I-7　カンポサント・礼拝堂・大聖堂・斜塔

図I-8

マヨルカ島に上陸するピーサ艦隊（1115年）

Bruxelles, Bibliotèque Royale, ms. 9029

(*Les anciennes chroniques de Pise*),

sec. XV, Loyset Liédet

(*Lamenti Storici Piasani*より)

図I-9　シチーリア遠征（年代不明）

（同上）

図I-10

ピーサに迎えられる皇帝カール4世

Lucca, Archivio di Stato,

Ms.107 (Sercambi, *Croniche*)

(*Lamenti Storici Piasani*より)

図I-11

皇帝の代官に忠誠を誓うピーサの

アンツィアーニとポポロ

（同上）